

---

# BLEACHに介入させられる俺

アーマリオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLEACHに介入させられる俺

### 【Nコード】

N9763M

### 【作者名】

アーマリオン

### 【あらすじ】

全てにおいて普通の俺はBLEACHのアニメに介入することになった  
理由は作者の気まぐれ（定番）だそうだ。はあ、なんでこんなこと選ばれた…

一話づつアニメを見て書いていってます

## プロローグ

みなさまどうも。ただ今死んでしまった、アキサメ・ケンイチ秋雨賢一です

みなさんご存知の通り、車と激突してしまいました

いや、まさか、自転車で移動してる時に後ろから当たってくるとは思わなかったよ

当たったのはわかったけれどそこからは覚えてないから、どうなったんだろう？

神「君は死んだ」

秋雨「わかってます」

神「そうか」

秋雨「それで、車が当たったあとどうになりました？」

神「違うバイクに激突、バイクがコケてローソンに突っ込み、バイクにあったソバが歩いていた人に顔に直撃だ」

秋雨「死者の数は!？」

神「君だけだよw」

いやいや、なんでそこで笑うんだよ

神「君はすごいな」

何がだよ。ただ死んだただけだぞ!!

神「ソバがね。食中毒の原因になる物だったんだよ」

秋雨「だから？」

神「君は食中毒になる人を助け、おばちゃんを助けたんだ」

ソバはわかったけど、なんでおばちゃんなんだ？

神「もし、普通に歩いていたら君が激突したバイクがおばちゃんにアタックしていたからだ」

秋雨「え！？、どんだけ事件が密集してんだよ」

神「さらに、バイクに突っ込まれたローソンは違法経営を  
している。それも発覚した」

どんだけ、俺はすごいことしたんだよ

神「まあ、奇跡だね」

秋雨「ですね」

それで、ここは天国か？地獄か？

神「全ての狭間だ」

秋雨「ですよ〜」

やっぱりね、定番ですよ〜

神「変なことは考えるべきではないぞ」

秋雨「へいへい」

神「まあいい、では君にはBLEACHの世界に行ってもらおう」

秋雨「なんでBLEACHなんだ？」

神「気分だ」

適当だね〜、そんなんでいいのか？

神「私だからな」

秋雨「へいへい」

神「ではチートの能力を授けよう」

秋雨「では・・・」

・取得したい能力・

- 1 - - 直死の魔眼
- 2 - - 仮面ライダーの全て
- 3 - - ロボット系の全て

秋雨「こんな感じですね」

神「いいだろう。ヤバくなったら助けよう」

秋雨「ありがとうございます」

良い神様でよかった

神「ではそこに用意した扉を開ければいい」

秋雨「はい、では・・・」

普通に行かしてくれるんだな、よかった

ガチャ  
扉を開ける音

秋雨「さあ、いk・グハア!!」

なんで開けたら物が飛んでくるんだよ!!

秋雨が扉を開けると扉からロケットパンチが飛んできた

神「では行ってらっしゃいw」

無理に1話(前書き)

文才がほしい

## 無理に1話

BLEACHの世界に行くことになったのはいいけど・・・

秋雨「・・・」

なんで赤ちゃんから start なんだろうか・・・

秋雨「バブウ」

というか、ここどこだよ。かなり恥かしいよ、これ。help me  
〜!!

神「急に転校生が現れると不自然すぎるからな。ちなみにそこは孤  
児院の前だ」

秋雨「バブ!!」

いやいや、それでいいだろ、それで。それより・・・孤児院の前っ  
ておかしいだろ〜!!

神「なんか、そのほうが楽だからさw」

あゝ、なるほど。作者の都合かゝ、しっかりしろよ作者

??「なぜ、ここに赤ん坊が？」

ほらな、ここで一緒に暮らすことになるんだらう

?1「オモイツキリ投げようかしら？」

秋雨「バブー！」

どんな思考回路してるんだよ、この女！？

?2「投げてはいけないよ」

お！、やっと、普通の人が出てきたな。助かった

?2「この子は置いとくべきだよ」

秋雨「バ！？」

おい、そんなひどいことをサラっと言つな！！。助けるよ

?1「それより、家の子にしましょうよ？」

ふう、生まれてすぐに死亡ってひどすぎるだらう

?2「そつだね、適当にすれば育つだろうし」

いやいや、ちゃんと見てくれよ。頭大丈夫か?!

?1「そつね。じゃあ戸籍は私がするわ」

?2「俺は幼稚園、小学・中学・高校の準備でもするか」

準備するの早すぎるだろ、どんだけ計画的にしてるんだよ!!

秋雨「バブウ」

いやだ、やめろ、俺はもっと普通の人に拾われるんだ!!

- 俺が拾われてから2年たった -

父は両儀 隼ジュウギ・ジュン、母は両儀 カエデで俺は両儀 式ジュウギ・シキと名づけられた

隼「さあ、式。今日も買い物に行くんだぞ」

優しい声で俺をパシリにする父親

カエデ「お菓子を1つは買っていいわよ」

それを普通に見ている母親

式「わかった」

あゝ、なんて平凡からかけ離れた生活してるんだよ、俺は・・・

嘘の笑顔をして家から出てから商店街まで10分。周りの人はとても優しい

八百屋のおっちゃん

「お、式。今日もか・・・ガンバレよ」

いつもおっちゃんはおまけでお菓子をくれる。優しいぜ、おっちゃん！！

式「ありがとう」

お肉屋のおばちゃん

「式ちゃん。今日もご苦労なことだね」

式「お手伝いだから」

あまり心配かけないとうにしているがバレてるだろうな

買い物も済んだら駄菓子売りに行きうまい棒を3つ買って家につくまでに食べる。これが俺の日課だ

式「はあ、今日の調理もメイドさんが作るんだろうな」

親は金持ちだ。だからメイドを雇っているのだが・・・食事の時しか呼ばない

式「ただいま」

隼「おかえり。さあ、洗濯物を取り入れるんだぞ」

式「・・・うん」

食事以外は全て俺がしている。全てをメイドがしていたが俺が買い物が出てからは俺がするようになった

式「動けよな」ボソ

カエデ「何か言ったかしら？」

なんでこういう時だけ聞こえてる？んだよ

式「タオルがボロボロだけど、どうするの?」

「適当なことを言っただけで済ませようか?」

カエデ「そうね。amazonで買うから即日配達で」

式「わかった」

金持ちが〜!!。まあ、全然使えるからね、このタオル(笑)

タオルや服など親がいらぬ物を質屋などで売りつつ生活をする俺。売るときはメイドさんと一緒に行っている

式「それじゃあ、いただきます」

隼&カエデ

「いただきます」

会話のない食事が始まり、テレビを見て一切俺に話しかけない親。まあ、俺はのんびり食ってるけどね

式「ごちそうさま」

隼&カエデ

「ごちそうさま」

食べ終わって食器を洗う俺とテレビを見て笑う親2人

式「おやすみ」

隼&カエデ

「ハハハハハハハ」

テレビの音で聞こえていないらしい。静かに部屋に移動し目覚ましをセットして寝る

式「さあ〜て明日もガンバルかな」

こういう1日が続いて気がつくと・・・

式「知らん・・・病院の中だな」

メイド「よかつた〜、起きました」

式「あれ、メイドさん。なぜここに？」

俺はたしか…買い物に行つてて倒れたんだっけか？

メイド「式様、大丈夫ですか？」

式「ああ、大丈夫。もう平気だから」

あれ？、体が動かない。なんで？

メイド「頭を打ったので体が重いんですね」

式「なんでわかったの？」

メイド「動きたそうだったので」

式「そうですか」

メイド「それでお話があるのですが・・・」

ここからとても長いお話が始まった。まとめると・・・

1 - - 俺の生活状況が保護施設に伝わったことで裁判が始まった

2 - - 商店街の人たちやメイドさんが証言したことで裁判で親が負け、俺の生活は孤児院ですることになった

3 - - 質屋で売った金は全てメイドさんが管理し通帳に預金していて、かなりの額になっていること

4 - - 親は外国での移住が決まった

式「そうですか」

これで普通の一人暮らしができる

メイド「高校生になるまで一緒に暮らしましょう」

え！？、嘘だよ。その笑顔は嘘だよ？

式「あの〜、嘘ですよ？」

メイド「いいえ、本当ですよ」

俺の平凡はいつからになるんだろうか・・・

・・・15歳になって一人暮らしが始まった・・・

式「やっと自由になった」

これまでサキ（メイドさん）と暮らしていたことを思い出すと泣けてくる

10歳まで風呂や寝る時、一緒だったからな。精神年齢20歳の俺にはきつかった

式「さうて、やることは済ませたから寝る」

高校の手続きも済ましたし、やっていけるだろう

式「あゝ、すっかり忘れてたよ」

俺は自分の教室について思い出した。俺・女顔だったんだな

A君「本当に君は男なのか？」

式「あゝ、そうやで」

1・3組全員に聞かれては疑われて1週間はのんびりと過ごすことができなかった

俺の見た目は空の境界に出てくる両儀式、そのまんまだからだ。なんでなのかと言うと神が・・・

神「そのほうが面白いじゃんw」

というわけで名前の時点で気づいてる人もいると思うけどな

そんなこともあって俺は一護と同じクラスになった。1ヶ月も経つと周りも静かになり俺は一人本を読みながら過ごしていた

式「・・・友達ができない」

みんなは友達ができているが俺は一人もできていない。まあ、いいかと思いつながら家に帰った

式「朝のニュースで連続爆破テロがあったから今日だな」

そんなことを考えながら俺は寝た

この夜、一護は死神になった

どうやって介入しよう・・・

2話～3話（前書き）

・・・うまく書けない

誤字・脱字があれば報告お願いします

## 2話〜3話

一護が死神になってからの翌日

式「はあ〜、学校に行くかな」

朝食を食べて・・・以下省略

式「今日も読書するかな」

いつもながら本を読むと時間が経つのが早いな

先生「みんな、席につけ〜。今日、転校生がきたぞ〜」

男子A「お〜!!、女子だ〜!?!」

女子A「いいえ、イケメンよ!!」

なんか、盛り上がってるけど・・・ルキアだろうな

先生「では入れ〜」

扉が開かれて入ってきたのは・ルキアだった

ルキア「私、朽木ルキアと申します。よろしくお願ひしますわ」

式「やっぱり言葉使い変だな」ボソ

先生「では適当に空いてる席に座って下さい」

ルキアが座ると授業が始まった

一護は事故の片付けで遅れるんだったな。災難だな、一護

ルキアの紹介と授業が終わり、昼休みになって一護がやってきた

浅野「一護、お前ん家、トラック突っ込んだんだった？」

小島「片付け終わったの？」

一護「そんな簡単に終わるかよ」

チャド「手伝おうか？」

ん、リアルで見るとチャドデカいな。俺の身長が175cmで

護と同じだけど、やはりデカい

一護「いや・・・いい」

浅野「チャド。お前じゃ逆に破壊しちゃうんじゃないの？」

一護「次々何だっけ？」

小島「現国」

ルキア「あら、あなたが黒崎君？」

なんて変な口調で話かけるんだ。それより話しかけに行くこと事態ひどいな

一護「ん？・・・んあ！！」

ルキア「隣の席になりました。朽木と申します」

あ、一護の隣だったな。一護も不幸体質なのかも知れないな

一護「ああああ！！、テメー！！」

浅野「な、なんだ。どうした？、一護？」

チャド「知り合いか？」

そうだよ、チャド。こいつは死神だ

ルキア「いいえ、初対面ですわ。ね、黒崎君」

小島「転校生の朽木さんだよ」

浅野「ね、ルキアちゃん」

ルキア「ヨロシク」

ルキアの手には騒げば殺す！と書いていた。というか！マークいるのか？

一護「うわああ」

ルキア「フン」

という奇妙な会話が終わって一護とルキアが教室から出て行った

式「俺も行くかな」

気付かれにくい場所で会話を聞いとくかな

\*\*\*一護とルキア、会話中\*\*\*

式「あ。行っちゃった」

会話を聞いて（原作知ってるから）わかったけど・・・一護の体ここに置いてていいのか？

式「はあ、保健室に置こう」

一護を持って保健室に行くのはいいけど先生が・・・

先生「そこらへんに置いといて」

と言ったのでダンスの上に置いといた。一護のリアクションが楽しみだ

式「今日の晩ご飯はカレーにするかな」

そのころ帰ってきた一護は保健室で自分を見て言った

一護「なんでこんなところにあるんだよー!!」

と言つ言葉が聞こえた?のでよかったw

式「うん。今日もうまく作れた」

俺の料理の腕はかなりあると自負している。2歳から料理してると  
当たり前なんだけどな

式「今日は織姫の兄と勝負か……。ガンバレ、一護」

そんなことを考えている頃、一護の家ではホロウ（織姫の兄）と戦  
い、ホロウの元が死んだ人間であることを一護は知った

式「さあて風呂に入るかな」

ドン！！、ガアアン！！

式「なんだ？」

なんか、横のアパートで音が……。そういえば横って織姫の住んでる所だったのか？

式「あゝあ、穴あいてるよ」

見たらルキアいるしここで介入なのか…。以外と早くないか？

\*\*\*一護とホロウ（織姫の兄）が戦闘中\*\*\*

織姫「お兄ちゃん、行ってらっしゃい」

兄「ああ、行ってくるよ」

こうして3話が終了しましたとさ。ちゃんちゃん

織姫「ねえ、黒崎君。これはいつたい・・・」

ボンッと音が鳴り見るとルキアが何か変な物を使い織姫を気絶させた

一護「織姫!!なんだよ、それ?」

ルキア「記憶置換だ。今夜の事件を消して換わりを入れて置いた」

一護「記憶置換!?!」

ルキア「まあ、入れ替わる記憶がランダムなのがたまに傷だがな。  
わからなければ明日まで待て」

式「事件は解決しましたとさ」

一護&ルキア「!?!」

式「あ・・・お疲れ様です」

あゝ、なんでこんなタイミングでバレルんだよ。最悪だな

ルキア「お前は誰だ?」

一護「お前...いつも本を読んでる女のような男の両儀式だ。覚えてないのか?」

あ、やっぱり。そんな感じなんだ、俺って…（・・、）

ルキア「そうか、でお前は…私たちが見えてるな」

一護「そういえば普通に会話してるな」

式「気のせいだ。さあ…帰れ」

うん、気のせいにして帰れw

ルキア「何者だ貴様？」

式「普通の高校生ですが？」

ルキア「まあいい、一護。アイツを捕まえる」

一護「はあ！？両儀はそこに住んでるのか？」

式「ああ。風呂に入ろうとしたら外がうるさかったからな。見たら黒崎が化物と戦っていたから見た」

一護「そうか…って全部見てたのか！？」

式「ああ、めっちゃかっこいいセリフだったなw」

戦闘中にあんなことを言うなんてさすが主人公w

一護「／／／／ 忘れる!!」

式「へいへい」

ルキア「どうやら話からして戦う力はないようだな。明日学校で話しをしよう」

お、なんかいい方向に話が進んでる

一護「はあ…って勝手に進めるな!!」

式「わかった。んじゃ、お疲れ」

ルキア「うむ。ではな」

一護「もういいよ」

さて、明日話でもするかな

場所が変わって今屋上にいます

一護「昨日のあれはこれか？」

式「www、けっこう面白いな」

いや、テレビで見るとリアルで見ると違うな。めっちゃオモロイw

一護「お前、この間家の連中にも使ったろ？」

ルキア「ああ、使った。・・・どうした？」

一護「まだ覚悟なんて大層なものを持ってねえ」

式「俺がいるの忘れてる？」

一護「俺は他人のために命を張るなんて約束できるほど立派な人間じゃねえからな。けど目の前で人が傷つくのを黙って見てられるほどクズでもねえ。手伝わせてもらっただけ、死神の仕事って奴をよ」

俺の存在忘れてないよね？。忘れてないよね？

ルキア「ああ、よろしくな」

式「（、；；）」

いいさ。主人公以外は空気になってしまふことくらいわかってたよ  
（涙）

ルキア「それで貴様はなぜ見える？」

式「・・・は！！。俺は変わった力があつてな」

ルキア「ほう、どんな力だ？」

一護「力があるならなぜ助けない！！」

ちよー！！、近い近い。あゝ、これは怖いわ。一護の顔はすごいね

式「あるのはわかるけど使い方がわからないんだ」

ルキア「それでは使えないな」

おいゝ、ルキア。ひどすぎないか、お前

一護「なんだ。楽になると思ったのによ」

式「悪かったな。役にたてなくて」

ルキア「まあいい、お前も今度から来い」

式「はあ!!なんで!?!」

ルキア「自分の身が危険になれば使い方も覚えるだろう」

待て!!、どんだけ俺をコキ使いたいんだよ

式「いやいや、無理だから」

ルキア「そうしよう。我ながら良い案だ」

一人で納得して先に教室に戻らないでくれ

一護「あきらめれる。両儀」

式「黒崎・・・式でいい。俺も一護って呼ぶから」

一護「ああ。わかった、式」

「護って顔以外はいいやつなんだな、心にキタよ

「護」なんか酷いこと考えてないか？」

式「（；^ ^）」

「護」まあいい

4話～5話(前書き)

文才がほしすぎる

『は機械音または必殺技名

## 4話〜5話

おはようございます、両儀式です

昨日は酷い結果で終わったけど今日も一日頑張る〜!!

式「場所が変わって屋上です」

一護「誰に言ってるんだ？」

式「気にしないでくれ」

一護「傷が一日で治るなんてな〜」

ルキア「驚いたか？私は木藤の鬼道がトップクラスだったからな。そのくらい朝飯前だ」

なんかすげ〜偉そうに胸張って言ってるけどBくらいかな？

一護「成績？なんだ死神って学校あるのか？」

ルキア「まあな、それより一護。これはどうやって飲むのだ？」

一護「あ？どうやってってストローを挿して飲むに決まってるだろ」

なんで紙パックジュース知らないんだよ……ハハハ

式「WWW」

ルキア「何がおかしい？」

式「なんでもないW」

小島「あれ？また一緒にいる。君たち仲いいんだね」

一護「アホ。これが仲良しに見えるか？」

小島「あ？両儀さん。珍しいね、一護といるなんて」

式「昨日から話すようになってね」

小島「そうなんだ、よろしく」

式「よろしく」

小島よ、君がこの中でもっとも一般人に近い人だ

小島「朽木さん、こんにちわ」

ルキア「こんにちわ（超笑顔）」

切り替えが早いな。死神って万能に見えるな

小島「当たったり。小島水色。15歳、趣味h…」

一護「女アサリだ」

式「そうか、意外だな」

小島「違うよ。ひどいな」

浅野「そこにいるのは美少女転校生の朽木さん。どうしてここに？」

小島「一護が口説き落としたんだよ」

浅野「一護デメエエ！！グッジョブ（泣）」

一護「お…おつ。泣くほど嬉しいか」

浅野「両儀はなんで？」

式「親しくなったからな、一護たちと」

浅野「さあ！！みんな、今日の昼飯はパーティーだぜ！！パーティー！！」

あゝ、泣きながらハシャイてるよ。すごいな。そしてチャドとインコの登場。大丈夫か？チャド、めっちゃ怪我してるぞ

一護「!!!?チャド…このインコどいどい?」

チャド「昨日……………もらった」

浅野「待て〜いい〜!お前今ハシヨッタだろ、悪い癖だ。ちゃんと言え」

浅野「って良いツッコミ役だな」

ルキア「案ずるな。確かに何か入ってはいるが悪いものではない。寂しがつているだけの霊だろう。今夜あたり魂葬に行くほうがよいだろうな」

一護「了解。また睡眠時間削られるのか」

ルキア「文句を言つな」

一護「へいへい」

ルキア「(しかし、霊の気配で即座に他人の心配までするとは……コヤツにも少し死神の心構えが備わってきた)」

\*\*\*一護がチャドとの出会いをお話中\*\*\*

式「ガンバレよ」

ルキア「何を言っておる、お前も行くのだぞ」

式「いやいや、無理でしょ?」

一護「メールするよ」

そんなことを言っただけ!!、「いつのときは流せ!!」

ルキア「ジューズうまいな」

一護「そうか」

式「流すな!!!!」

そして場所は変わって俺の家です。はあ、明日の朝からかよ、だるいな

式「ん、肉ジャガうまいな」

みなさん、お休みなさい

次の日の朝

ブルルルル、ブルルルル

式「ん？電話か…」

一護「早く来い！！チャドがどっかに行きやがった」

式「そりゃ普通だろ？」

一護「怪我してるんだよ！！」

式「！！わかった。今すぐ行く」

一護と合流してルキアの説明を聞いています

ルキア「わかったか？」

一護「お前のへたな絵じゃ、わかるもんもh…グハア！！」

式「朽木さんって絵……へタなんだ…グボハア!!」

やっぱり、ド突かれるのか!!

一護「なんとか……そうだ。チャドが持っていたインコそれに憑いていた霊を辿ればいいじゃないか」

ルキア「それは無理だ」

一護は主人公なんだ、無理なことはないZE

式「なんか、めっちゃ線が立ってるな」

ルキア「これは!!!!」

一護「見つけた。こつちだ!!」

一護の成長速度に驚くルキアと走り続ける俺たち。俺は必要なのか？

一護「いた。チャドだ」

式「やっと見つけた」

違う方向に行ってしまうチャド。原作通りですな

一護「あのバカ。なんで逃げるんだよ」

式「（そりゃ、危険だからだろ）」

一護「一人でいると危ね〜!!」

夏梨「一兄〜」

ここで夏梨の登場!!。あ、以外と女に見える。テレビの時は男にしか見えなかったよ、すまん

一護「!?夏梨どうしたんだよ?お前。フラフラじゃねえか」

そして座り込む夏梨、駆け寄る一護。ドラマの1シーンに見えるのは俺だけなのか?

ルキア「一護。お前はそいつを一旦家につれて帰れ。奴はこいつが助けに行く」

チヨ!!!、なんで俺やねん。俺たちやる?

一護「すまない。任せる」

式「エッ。。。。(マジ?)」

一護「無茶するなよ、ルキア」

ルキア「ああ、じゃあな」

俺は空気か!!空気なのか!!。(。、。)

あゝ、行っちゃったよ。俺が戦闘するのか……

ルキア「(くそ!!、追いつけない義骸でさえなければ。義骸の身体能力値は普通の人間と同じというのはどうということだ!!技術開発局の変人どもめ!!)」

ルキアの息が上がってきたな。こっちは必死なのに一護はシリアスな場面だろうな

ホロウ「良い匂いがするな」

式&ルキア

「!!!???」

ホロウ「あんたすげ〜うまさうな匂いだ、食わせてくれよ。その魂を!!!」

ドガアアアーン!!!

式「朽木さん!!!」

ルキア「大丈夫だ」

ホロウ「へ〜一発じゃ死なねえの。それにあんたらには俺が見えてるみたいだしよ〜。一体何m…グホオ!!!」

あゝあ、喋ってる途中でアゴに蹴り入ったよ。敵の後ろに回って……

ルキア「破道の三十三 蒼火墜」

ドオン!!!

ホロウ「今の術知ってるぜ。死神の術、そうだろう?でもあんたのは弱いな〜、スカスカだ」

ルキア「(まだ術を完璧に打つまで回復してないのか!!!)」

さっきから俺のことをガン無視してるよね?キレていいよね?キレて?

ルキア「なぜ、あのインコをシッコク追い回す。なぜだ!？」

ホロウ「さあね?あんたが俺にオトナシク食われるなら教えてやるよ、ケケケ」

ルキア「貴様!?!」

式「変身!?!」

今回はカブトでいこう、ボコボコにしてやる。仮面ライダーカブト、マスクドフォームだ

ホロウ「グハアア!?!」

ルキア「!?!ホロウを殴った。こいつ霊が見えてるのか?」

そして何も無い所を殴っているチャド。オモロイなって俺の変身見てください(泣)

ルキア「いや、違うか」

ホロウ「なんだい、まぐれ当たりかい。見えてんだと思っ t……ゲ  
フン!?!」

ルキア「（こいつには恐怖心がないのか）」

式「俺のことも見てくれ（泣）」

ルキア「ボクつとするな。逃げる！！奴は飛んだ」

チャド「転入生、あんた幽霊見えるのか？」

式「おゝい、俺もいるぞ」

ホロウ「ここからヒット&amp;mp;アウェイで隼みたく仕留めてやるうか？」

チャド「オオオオオアアアアアア！！」

ドガバキイイ！！

電柱（木のやつ）を壊したよチャド

ホロウ「何だと〜！？」

チャド「さあ、どっちの方向だ？」

ルキア「そのまま振り下ろせ！！」

ドガアアアン！！

ルキア「さあ観念しろ。時機お前を片付ける奴がやってくる」

空から蛙？が飛んできて俺た……俺以外を拘束し地面に倒れた

ホロウ「まったく、そんなんだから俺たちにやられてしまっただぜ」

俺以外捕まってるよ。俺の空気扱いはなんだよ（泣）

式「キャストオフ」

『CAST OFF』『CHANGE BEETLE』

機械音が鳴り、俺の装甲が浮き上がり飛び散る

ホロウ「ガアアア！！」

ルキア&チャド

「！！！？？」

よし、二人についてた蛙？は全て吹き飛ばし殺した

ルキア「なんだ、その姿は!？」

ホロウ「貴様一体何者だ!？」

式「やっと出番だな……CLOCK UP」

『CLOCK UP』

ルキア「!？消えた？」

まずアゴに膝蹴りをし背中に連打を……

式「オオオオオオ!!!」

ホロウ「グオオオ」

うん、まだスッキリしない。だから顔に十発ほど叩き込んで

ホロウ「グアアア」

『ONE TWO THREE』

式「ライダーキック」

『RIDER KICK』

タキオン粒子が足に集中してホロウを蹴る……顔面を

式「今まで無視してきた分だ〜!!!」

ホロウ「ギャアアアア!!!」

式「よし。スッキリした……え!?!」

あれ〜、俺死神じゃないのに倒したら地獄門が出てきた

一護「大丈夫か?…っってお前誰だ?」

式「式です」

一護「なんだその姿?」

式「秘密ってことで」

一護「そうか」

さすが一護、話がわかるね〜っじゃなくて地獄門が出てる!!!

一護「なあ!?!」

ルキア「地獄だ。斬魄刀で洗い流せるのは死んでからの罪だけ生前に大きな罪を犯したホロウには地獄の門が開かれる」

ホロウ「アアアア！！ギャアアア！！」

あゝ、なんか出てきた青い腕が持ってた棒で串刺しになってる

ドオオン！！ 扉が閉まる音

ピキピキ、パライイン。あゝ、粉々になって碎けて消えたよ、地獄門

一護「地獄に落ちたのか？」

ルキア「・・・」

華麗なるスルーですね。わかります

シリアスな場面も終わり魂葬したし帰ろうかね

ルキア「おい、式」

式「何？」

ルキア「さっきの姿はなんだ？」

一護「それは俺も気になる」

チャド「俺も」

式「あれは仮面ライダーだ」

この世界にあるのか知らんけどいけるだろ？

一護「昭和にやってたな」

式「（やってたんだ。昭和ってことはBLACKかな？）」

ルキア「仮面ライダーって何だ？」

チャド「正義のヒーローだ」

式「知っているのか!？」

チャド「ああ」

こうして俺とチャドの絆は深まった?のであった

## 6話〜7話

昨日の初ホロウ戦でわかったことは力は思い通り使える。倒すと地獄門が出る

地獄門がなぜ出てくるのかは知らないけれど気にしない

式「これだけか、まあいいや」

いつも通り高校にきて授業を受ける。ルキアがいない…たしか浦原商店に行ってるはずだ

ルキア「みなさ〜ん、ウフ。おはようございま〜す」

キモい。なんて不自然な笑顔なんだ。なんで誰もが普通として見てる！この教室の人たちはおかしい！！

小島「あ、おはよう朽木さん」

浅野「朽木さん、今日も素敵ッス」

小島「珍しいね。もう三限終わっちゃったよ」

ルキア「ちよつと家の用事で。所で黒崎君ちよつといいかしら？」

「護」用があるならここで言えば……グアア!!」

完璧に鳩尾に入ったな

ルキア「大丈夫〜黒崎君〜? 大変〜保健室に行かなくっちゃ〜」

式「俺もついて行くか」

小島「今殴ったよね?」

浅野「見えてない」

場所は変わって渡り廊下? についた

ルキア「なぜ貴様がいる?」

式「暇だから」

ルキア「まあいい。ほれ」

ルキアは一護に物を渡した

ルキア「それは義魂丸。肉体から魂を強制的に抜く丸薬だそれを飲

むと代わりの魂が入る。私がない時に使え」

一護「Soul Candyって書いてあるが？」

ルキア「それは女性死神協会が訴えてそうだった」

一護「なんでアヒルなんだ？」

ルキア「私だって一番人気のうさぎのチャッピーがほしかったわ！  
！」

うさぎって……www。かわいい所あるんだな。ハハハw

一護「そうか、ウサギがほしかったのか……お前」

ルキア「なんだその目は！！侮辱する気が貴様！！」

式「ハハハw」

ルキア「お前も笑うな〜！！」

一護「さっきの説明でいまいちわからなかったんすけど？」

ルキア「飲め、一回飲めばすぐわかる」

そして義魂丸を飲んだ一護。あゝあ飲んだよ



式「お前……なんだ？」

義魂丸「お前には眠っててもらおうよ」

そう言うと殴りかかってきたがそれを受け流し距離を取る

義魂丸「へ〜、なかなかやるな。ではじゃあな」

逃げてしまった……たしか1年3組に行ったよな。早く帰ってきてい、一護〜

式「ブリッツガンダム!!!」

俺が叫ぶと体が光ると一瞬にして機動戦士ガンダムSEEDに出てきたブリッツガンダムになっていた

式「さあて今どこにいる？」

ちょうど教室にジャンプして入る所を見つけた

式「間に合え〜!!」

ブースターで加速しつつミラージュコロイドで姿を消して突っ込む

義魂丸「ここ1年3組d……グハア!!」

式「セーフ」

捕まえた一護?を持ったままどこかに行く

織姫「今黒崎君見なかった?」

有沢「気のせいでしょ」

なんとか気づかれずに公園に連れて(持って)きて一護にメールしたから万事OKだ

プルルル、プルルル

式「はい。あ、一護かメールよ……」

一護「指令が次々にきてすぐに行けない、なんとかそっちで片付けてくれ」

式「（、・、・）エツ？」

義魂丸「どうやら仲間は今来ねえみたいだな。じゃあな」

式「あ、逃げられた。まあいいや、次は小学校だったな」

俺は移動して空で様子を見たら一護と一護？が協力？してホロウを倒して話をしている所に帽子オジサンがやってきていた。進展が早い？気にしないでくれ

オジサン「おやおや。やっと見つけたと思ったらボロボロじゃないっすか。これじゃあ用意した道具、ほとんど無駄になっちゃったっすね」

そう言うと杖を一護？に挿したら頭から玉が出てきた。それをオジサンが拾う前に俺が取る

オジサン「あんた何者っすか？」

式「一護遅いぞ」

一護「もしかして式か？」

式「あゝ、そっだ」

オジサン「知り合いみたいっすね。ではそれを渡してくれないっす

か？」

ルキア「なんだ浦原？貴様の店は客に売った商品を金も返さずに奪い取るのか？」

浦原「そんじゃ、しかたない返金しますよ」

ルキア「こちらはこの商品で満足している」

難しい話をしている二人を遠くから一護と待っていると戻ってきた

ルキア「帰るぞ」

一護「お、おう」

帰りに姿のことを聞かれたが軽く流して家に帰った

式「あゝ、だるかった」

今日の晩飯は出前でお寿司を頼んだ。やっぱりサーモンはうまいZE

翌日、今日も一日学校に来て本を読んでいると……

織姫「おはよう黒崎君」

一護「お〜、おはよう井上（超笑顔）」

そういえば明日は一護の母の命日だったな。なんてピリピリしてるんだよ

そんなこともあってか、今日は平和で普通に過ごした

式「今日は身体能力の確認でもするかな」

腕立て、腹筋、スクワットを千回づつしてもまったく疲れない体になったな〜。これでも死神には負けるってどんだけ死神強いんだよ。情報は神からメールでくる（週に2回）

体力強化などを考えながら風呂に入りストレッチしてから寝た

その頃、一護の家ではにぎやか&シリアスな現場が繰り広げられていた

同時刻？に尸魂界ソウル・ソサエティではルキアの行動に疑問を持った上層部が刺客を手配していた

神「戦闘がないじゃん、次回は絶対に戦闘をするぞ〜」

式「そんなこと、すんなり!!!」

8話〜9話(前書き)

今回は短いです

## 8話〜9話

今日は一護たちが墓参りに行くのでバレナイようにストカーしてます

式「俺はロリコンではない!!」

ルキアと刺客が話す&一護と刺客の勝負を見ずに一護の妹を影から護衛?しています

夏梨「なあ!!」

遊子「どうしたの?夏梨ちゃん?」

ホロウ「見つけた」

夏梨「親父は?」

遊子「住職さんとお話があるって」

夏梨「く!!(役立たずが)」

ホロウ「しばらくわしに付き合ってもらおうぞ」

俺の出番だな。さあ、お前の罪を数えろ!!

式「変……身……！」

アクセラドライバーを腰に装着しアクセラメモリを持ちスタートアップスイッチを押す

『アクセラ』

そしてスロットに挿しパワースロットを回す

『アクセラ』

ブウウウウ……！！

赤い鎧に身を包んだバイクを元にしたライダー、仮面ライダーアクセルになった

式「さあ……！振り切るぜ」

ホロウ「お前は一体……？」

夏梨と遊子の前に立ちエンジンブレードを構える

夏梨「なんだよ、お前？」

式「一護の知り合いさ。早く逃げる」

夏梨「……わかった、行くよ遊子」

遊子「う…うん」

二人が動き出したのを確認し斬りかかる

式「オオオオ！！」

ホロウ「ヒヒヒ」

ホロウの毛？の攻撃を避けつつ斬りかかるが当たらない

ドガアアアン！！

ホロウ「当たると痛そうだね」

式「（早くこい、一護）」

同じことをやっているが一護たち+ がやってきた。するとホロウ  
がどこからか不気味な女？を出した

「護」「どういうことだ？」

ホロウにいる女？を見て啞然とする一護

ルキア「自ら姿を隠し首から生えた疑似餌に人の形をとらせ、それを見た人間を襲い、己の力を高めていく。グランドフィッツァー。50年以上の永きに渡って我々死神を退け続けてきたホロウだ。そしてヤツの好物は……女だ」

「護」てことはおふくろはこいつに……！」

そう言つてホロウに突っ込む一護とそれを見る俺。また空気になつてきている

ルキア「縛道の九 撃」

苦しみもかくホロウはルキアを毛？で殴った

ルキア「ゲハア……！」

墓石にぶつかり倒れるルキアにくる追撃を俺が助けようとしたら+

の人が助け串刺しになってしまう

+ 「ああああ!」

式「……」

俺は無言で毛?を斬り+ の人を助けることに成功した

一護「なんでそこまで?」

+ 「守るんだ、ツンツン君。わかるだろう?」

ぶっ倒れる+

一護「死神のくせに死んだのか?」

ルキア「死神とて不死身ではない。形は違えど死は…」

+ 「ZZZZZZZ」

( ) ( エー、マジで寝てるな

一護「おい起きろ、紛らわしい!」

コン「姉さん！！なんかすごいことだ」

ルキア「コン、妹たちをつれて逃げろ」

コン「へい」

一護「お前ら手を出すな……頼む」

一護とホロウの一对一の勝負が始まった

式「俺の出番が」

シリアスな場面を見てるが……ヒマっす

一護「ガアア！！」

ホロウ「言っただろう。怒りは刃を鈍らせる。次の一撃で終わりだ小僧」

一護に手を刺しホロウが追撃しようとした時、間に突如光が生まれる

+ 「ありやあ母親の想だ。思いが形になったものだ!!」

ルキア「疑似餌が死に際の母親の想いを記憶していたというのか!」

一護「死に際の想い」

+ 「まだこの勝負わからないぜ」

母親「一護。私は誇りに思っているよ。父さん、夏梨、遊子そして一護、あなたに出会えたことを本当に誇りに思っているよ。一護…生きなさい、強く、優しく、そして笑顔で。一護…ありがとう」

一護は母親の言葉を聞き希望を見出した……と俺は思う。それより  
出番くれ

一護「怒りは刃を鈍らせるか……たしかにそうかもしれないけど  
な。1つ勘違いしてる……てめえ程度の奴を倒すにはその鈍った刃で  
十分だってことだよ!!」

斬魄刀をホロウに刺し斬った

ホロウ「ギイイヤア!!」

逃げ台詞を吐きながらホロウは逃げて行った

ルキア「一護！！戦いは終わった、終わったのだ」

一護「まだまだアイツはまだ死んだ……グハア！！」

うるせえ、早く気絶しろ！！あゝ、俺の出番少なかったし必殺技も  
決め台詞も言っただろ！！

ルキア「一護！！……所でお前は誰だ？」

いまさらかい！！ずっと隣にいたのに空気扱いしてたのかよ！！

式「…式ですよ」

ルキア「お前の姿は何個あるのだ？」

式「さあな（誰が教えるかバカ）」

+ 「さて帰るわ。まあ、バレル時はバレルしな、バイバイキーン」

神「ネタだな」

式「あゝ、ネタだな」

10話～11話(前書き)

取得する能力の1つガンダムの全てをロボット系の全てに変更しました

10話〜11話

昨日は出番が少なかったから今日の虚はボコボコホロウにしてやる

今学校にいます。暇です、早くこのストレスを解消したいです

織姫「ブハハハハ」

一護「：（；；。ゝゝ。ゝゝ）：」

織姫「あれ、リアクション薄いな。なんだかわからない？これ」

今最も有名な番組のポーズ？手をクロスさせ肩の所で止めポーズを取り一護に聞いている織姫。一護にするのはオカシイぞと思っていると竜貴に連れていかれる

浅野「おはよう一護」

一護「ん？」

浅野「浅野です」

小島「水色です」

チャド「・・・」

三人が織姫と同じポーズを取り……

浅野&小島

「ブハハハハハ」

チャド「……」

一護「……」

場所は変わって観音寺の生番組（心霊スポット）を見に来ています。本当は遠くから見物する予定だったがルキアに連れてこられました

（涙）

ルキア「どうした？」

ルキアの声を聞き俺と一護が振り返ると……

ルキア「ブハハハハw」

ルキアまで織姫と同じポーズをしていた。……何も言えねえ

一護「……」

式「(・^・^)」

ルキア「ってこんなキャラだっけ？あれ〜イメージが崩れていく気がする」

ルキア「時にこれは一体何の祭りなのだ？」

一護「全然わからずについて来たのかよ!!」

式「知らんかったんかい!!」

アアアアアアア!!

式&一護

「!?!」

一護「虚とは違うな」

ルキア「虚に堕ちかけている。デミ虚」

式「こんなのもいるんだな」

一護「仮面は被ってないし穴は開いていないな」

ルキア「穴は心無くし本能の塊になった印。ドクロを模様した仮

面は剥き出しになった本能を外界から守るための盾」

ここで絵で説明するルキアを一護はぎこちなく流したら叩かれています。まあ、流したくなるよな、何回も見てたら

一護「ほつといていいのかよ!？」

ルキア「こんな注目された所で暴れられても困る。魂葬は祭りの後でもよかるう」

一護「でもよお」

ルキア「ホロウになる直前というのは恐ろしい叫び声をあげてもっと苦しむものだ。あやつがそう見えるか？」

デミ虚「アア! !なんだテメエ。テメエも俺様の病院取ろうってか! ?いい度胸だこら! !変な帽子被りやがって! !」

一護「見えねえな」

式「だな」

ルキア「そうだろう。胸の開きかけの穴に妙な刺激でも与えむ限りホロウになるまでまだ半年……」

喋っている最中に観音寺が変な棒?で穴が開きかけている所に攻撃している

一護「何やってんだアイツ!!」

ルキア「あれでは虚になるのを早めるだけではないか!!」

阻止しに行く一護だが警備員に止められて困った所を浦原の助けにより死神化して止めに行こうとしたが失敗する

一護「消えた!?!」

式「しゃあああ!!」

俺は静かに森に移動しブラックサレナに姿を変える。ナデシコに出てくる機体だ

ルキア「違う、デミ虚は虚になる瞬間一度霧散し再構成される。しかもここに心を囚われていたのなら……」

携帯を開き確認し頭上を見上げる

ルキア「上だ!!一護」

一護&観音寺

「!?!」

式「行くぜ!?!」

ボソソジャンプで虚の目の間に移動しタックルで屋上に吹き飛ばす

一護「なんだ今の黒いには!?!」

虚「食わせる」

式「お前にはストレス解消をしてもらおう」

腕を構えハンドガンを撃ち続ける

虚「ガアアア」

ボロボロになりフラフラな虚を確認しディストーション・フィールドを展開し突っ込む

虚「グハア!?!」

式「アーマーパージ」

屋上入り口の壁にめりこみ動かなくなった所に装甲をパージしてそれをぶつけて虚は動かなくなった

一護「虚はどうした!？」

式「そこにいる」

観音寺「グレイト!!素晴らしい!!素晴らしい!!」

一護「観音寺、あんまりはしゃくなよ」

観音寺「化物を倒したんだぞboy……!?!?そんな彼は」

シリアスな場面(原作通り)になるので俺だけ先に帰る

観音寺「Mission complete。ブハハハハ」

観客たち「ブハハハハ」

観音寺「boy見事な戦いだつた。これからも私に力をかしてくれ」

一護「まあ、時々ならな」

観音寺「ありがとう。youは今日から私の……一番弟子だ」

一護「格下げだく!!!」

浦原「さっきの黒いのは一体何だったんすかね？」

ストレスの解消にはなったけど浦原に警戒されてしまいブラックセラナにはなりにくくなってしまった

日付が変わり今校長室にいます

鍵根先生「まったくもって信じ難し。お前らが何をしたかわかっているのか？」

と言っている体育系の先生。ムキムキの体です、ガチムチかも

鍵根先生「全国に一護……お前がどれほど我が校の恥をさらしたかわかっているのか!？」

式「なんで俺まで……」

竜貴「鍵根先生。私と井上は呼ばれる理由ないと思います」

鍵根先生「お前らも一緒にいたんだろっが」

竜貴「私は偶々会っただけで無関係です」

一護「テメエ、自分たちだけ助かるうってんのか」

竜貴「私たちは教室に戻らせてもらいます。行くよ織姫」

竜貴と織姫が教室に帰ってしまった

ルキア「すみません。それもこれも全て私が…はしゃいでTVに映ろうとする黒崎君を止め切れなかった…私のせいなんです。私は本当に必死に…でも……（嘘泣き）」

鍵根先生「ああ、泣くな朽木。わかったお前は悪くない、そうだな」  
ルキア「黒崎君はどうなっても構いませんから私だけは……」

鍵根先生「ん？こら！お前ら！！逃げたらどうなるかわかってんのかお前ら…って後悔してる間に朽木もいなくなってるし校長！！」

校長「TVに映ったくらいでそう叱らんでも」

鍵根先生「何もかも信じ難し！！」（大泣き）」

逃げ切ってみみんなと歩いているとルキアの携帯が鳴り一護と一緒にどこかに行ってしまった

織姫「あの二人もしかして付き合ってるのか？」

浅野「ま〜さ〜か〜朽木さんにその気はないな」

チャド「ん？」

何かに気がついたのか窓のほうを見るチャド

式「あれって石田だよな？」

チャド「ああ」

そういえば今日は滅却師クインシーとの初対面だったな。気にせず家に帰った

式「しっかしうまく戦闘ができないな、経験がないからか」

神「これからさ（黒笑）」

式「不気味だ」

日付がまた変わり学校では一護が石田を警戒して石井のコメカミに怒りマークが見えた（のループ）だけで虚は出てこなかった

一護「（・・・）ジーン」

石田「（#・・・）」

式「空気が重い」

学校が終わり石井の挑発に乗った一護を遠くから見ているなら……

石田「君は何をしてるんだい？」

式「バレてたか」

一護「ちょうどいい式。立会人になってくれ」

式「ええエエ!!」

12話〜13話(前書き)

どんどん文字数が減って戦闘シーンが続かない

## 12話〜13話

一護「さあ、説明しろよ勝負のルールを」

石田がポケットから指輪？を取り出した

石田「これで勝負しよう」

一護「なんだそれ？」

石田「対虚用の撒餌だ。砕いて撒けば虚が集まってくる」

一護「なんだと!!！」

あゝ、絶対に被害出るな。そしてめんどいことになるよ

石田「集まってきた虚を24時間以内に多く倒した方が勝ち。どうだ？分かり易いルールだろ？」

一護「ふざけんな!!俺らの勝負のために町中の人間を危険に晒す気か何様だよテメエ!!！」

石田「うるさいんだよ!!他の人間の心配なんて必要ない。集まった虚は一匹残らず僕が殺すんだから」

式「勝手に参加する」ボソ

石田「君も虚から人々を守り切れる自信があるんだ。この勝負受けられるはずだ」

そう言つて撒餌を砕いてしまった。二人とも学校に移動したので俺は別行動に移った

式「ここでいいかな…変身!!」

腰にダブルドライバーを出し右にサイクロンメモリ、左にジョーカ  
ーメモリを挿す

『CYCLONE』 『JOKER』

機械音が鳴り俺の体は真ん中に銀色の線が入り右が緑、左が黒の仮  
面ライダーWになった

式「さあお前の罪を数えろ!!」

決め台詞も決めたので一護と石井が処理しきれていない虚を倒して  
いく

式「なんでこんなに沸いてるんだよ」

周りを見れば虚、虚、虚ばかりで空が汚いな。少しづつ虚を倒して進むと倒れているチャド（右腕が変化）と夏梨が虚に襲われそうになっていた

チャド「逃げろー!!」

夏梨「え!?!」

式「クソつたれ〜」

虚の攻撃を受け止め蹴りを放ち距離を取る

式「早く逃げろ」

夏梨「お前は一体?」

チャド「その声は式か!?!」

式「あとで話すから早くしろ」

チャド「無理だ。体が動かない」

式「。。。。」

またも迫りくる虚を殴り飛ばしマキシマムスロットにジョーカーメ  
モリをセットする

『JOKER・Maximum drive』

式を中心に風が吹き荒れジャンプして虚に蹴りを放つ。足の先が光  
っていたのに気付かないまま……

式「JOKER・Extreme」

虚「ギャアアア!!」

悲鳴をあげ虚を倒した……ってまだいるから一度学校に戻らないとな

夏梨「お前一護の友達だろ?なんなんだあれ!？」

式「ごめん、今は急いでいるんだ」

ジャンプして家の屋根を移動しながら学校に向う

夏梨「一体何なんだよ!!!!」

\*\*\*場所は変わって学校\*\*\*

織姫「見たいテレビがあるから早く帰ろう」

竜貴「ちよ、ちよ織姫」

織姫「ほらね。お願い早く早く」

私が最初に思ったのは気づかなきゃよかった。次に思ったことはここから離れなきゃ、1つだけわかることはあれは危険だということ

式「間に合え〜……つてええ!？」

織姫を助けようとしたら彼女を中心に風が発生して織姫を守った。あゝ、そういうばここで力が覚醒するんだったな

式「勝手に介入する」

ジヨーカーメモリをメタルメモリにサイクロンメモリをルナメモリに変える

『ルナ』 『METAL』

機械音が鳴り右が黄色に左が銀色に変わり背中にメタルシャフト（棒）が現れる

式「せええい!!」

織姫が虚の攻撃を防いで竜貴たちを治す所に虚を攻撃する

織姫「あなたは一体？」

式「仮面ライダーW」

虚「また変な力を持ったのが出たわね」

式「うるせ〜!!」

メタルシャフトでボコボコにしまくる。ストレス解消〜W

織姫「棒が伸びた〜……キュ〜ン」

なんかかわいいこと言いながら倒れた……って倒れるな……!!!!

虚「なんなのよ!!」

気にせずにメタルシャフトのマキシマムスロットにメタルメモリを挿す

『METAL・Maximum drive』

式「オオオオ!!」

虚の頭を連続で叩き地面に5mのクレーターができた

虚「ギャアアア!!」

虚を倒して織姫を家に送ろうとしたら浦原が現れた

浦原「おや、また変な火と人？つすね」

式「いやー護といた式ですけど……」

浦原「あゝあの時の……すいませんがご同行してくれませんか？」

式「はあゝ、わかった」

\*\*\*場所は変わり浦原の店の中\*\*\*

織姫「両義君がああの仮面ライダー？だったんだ」

式「ああ。式でいいから」

織姫「え……うん、わかった」

ここで浦原が現れ事情を説明中……

浦原「お二人は一護の影響ですがあなたは違う……なんなんですか？」

俺のほうを向き、ものすごい目で見ってくる。怖いね

式「黙秘権を発動する」

浦原「まあいいでしょう。ともあれ目の前に現れた扉を開けるか否かはあなた方しだい」

鉄裁「店長……準備ができました」

2mの長身におさげにメガネというルックスの常に浦原喜助をサポ  
ートしている片腕的存在が現れた

浦原「では行きますか……ついてきますか？見せてさしあげますよ、扉の向こうを……」

式「行ってらっしゃい」

浦原「あなたは強制です」

式「やっぱりかよ」

## 14話〜15話

浦原と一緒に一護のいる所に移動しています。暇です、とても暇です

式「浦原さん、何するんですか？」

浦原「一護さんたちを助けるんすよ」

織姫「急ぎましょう」

チャド「うん」

浦原「あなたたちは違う所で待機ですよ」

チャド「なぜ？」

浦原「邪魔になるっすからね」

織姫&チャド

「・・・」

この言葉に反論できない織姫とチャド、力が覚醒したばかりだからしかたないよ

そのころ一護が滅却師の歴史をルキアから聞き石田と協力して戦っている所に浦原たちがついた。俺はチャドたちと一緒に違う所で見

学している

ズガガガガガ!!!

雨「こ…こんにちわ」

バズーカのような物で虚を倒したつむぎや・ウルル紬屋雨

バキイイ!!!

ジン太「ジン太ホームラン!!!」

バット?で虚をなぎ倒している花刈はなかり・じんたジン太

鉄裁「フウウン!!!」

素手で虚を倒している握菱つかびし・テッサイ鉄裁………って素手で倒すな!!!

浦原「黒崎さん助けに来ましたよ」

一護「下駄帽子!!!」

まさかの仲間？の助けにより有利になった……が石田だけが空気になっただけ……ガンバレ石田

浦原「ザコは私らが引き受けますよ。黒崎さん……あなたはあいつの戦いに専念できるようにね」

浦原はとてつもないデカさの虚を指差して言った……ってデカいな

ルキア「メノスだ……幾百の虚が折り重なり混ざり合って生まれたとされる巨大な虚だ。しかし……あんなもの教本の挿絵でしか見たことがない……メノスグランデ。一般の死神が戦える相手ではない」

石田「なんてデタラメな大きさだ」

一護「あんな奴は斬って斬って斬り倒す！！行くぜ、石田」

石田「待て！！黒崎」

ルキア「待て一護。貴様の勝てる相手ではない」

一護を止めようとしたが浦原に邪魔され縛道で動けなくされた

ルキア「これは……縛道！？」

浦原「この戦いは必要な戦いなんすよ。朽木さんにとっても…彼にとってもね」

突っ込んだ一護が蹴り飛ばされダルマ落しのように倒そうとしていたことに石田は愕然し作戦を練ろうと一護の刀に触った瞬間……

石田「（これは！！流れ込んできている…これは黒崎の力の影響か！？）」

一護「作戦たつてな………うわぁ！！！」

急にデカくなった石田の弓？を見て恥ずかしい声を上げる

石田「僕たち…あいつを倒せるかもしれない！！！」

チャド「石田と隣にいる一護は見えるか？」

織姫「うん。ここで見ていて下さい…か。（見て…それから選べることかな？私たちの歩く道を！！）」

シリアスな場面になっているので……俺は一護の所に向って走り出

した

織姫「そういえば式君は？」

チャド「いないな」

俺が一護たちの所についた頃にはメノスを倒して……って逃げてね  
〜！！本来は逃げるはずなのにいるし！！めっちゃ闘志ギラギラの  
目でこっち見てるし！！

石田「くそ！！ダメなのか！？」

一護は倒れてしまい動けない状況に石田は焦っていた

浦原「これはヤバイっすね〜」

式「間に合ったな。こい…グランゾン…！！」

式の姿は消えそこに蒼い魔神が現れた

石田「なんだ、その姿は！？」

式「さてお終いしましょうか」

石田の言葉など気にせず胸のパーツを開き紫に光る玉を出す。それを持つように手を伸ばした

ルキア「なんだあれは!？」

式が出した玉は一瞬で巨大な禍々しいエネルギーになり赤い電気を発生させ辺りの地面は抉られていた

式「ブラックホールクラスター、発射!！」

式の放った攻撃はメノスに当たり一瞬にして消滅させてしまった。その時の余波で公園の3分の1も消滅した

式「うん……成功だな」

ルキア「成功ってなんだ!？ミスしたらどうなっていたのだ!？」

いや、失敗したらここにいる全員を消滅してしまう……なんて言えないよな

式「さあな」

一護「うわ！！なんだこれ！！？」

一護の刀が形は崩れていた……自業自得だなと思っていたと石田が助けるために一護の霊力を吸い上げ吸い上げた分、矢を放っていた

石田「君も手伝わないのか！？」

え…なぜに俺？まあいいや。グランゾンだし霊力くらい吸収できるだろ、対消滅エンジン搭載してるし

式「へいへい」

俺が一護の刀を触って吸収行動するとすぐに刀は元の形に戻った

ルキア「なんて吸収力だ」

浦原「一度OHANASHIしないっすか？」

式「それは断つときます」

なんとか浦原のお話につき合うこともなく家に帰ってきたけど疲れた。チャドと織姫にも俺の姿見えてるうしな〜めんどいな

式「もう寝る」

体が限界だったからすぐに眠れたがなんで書斎にいるんだ？

神「私の書斎だからだ」

あゝ神様の書斎か……ッテナンダッテ

神「面白くないね」

式「勝手に心を読みな」

神「そんなことより今日……グランゾンになったよね？」

式「ああ、なった」

神「君の体はドエライことになってるよ」

式「何!?!」

神「答えはCMのあとでW」

式「ふざけ……ウフアア……!」

殴ろうとしたら地面に穴が出現し落ちた……覚えてろく!!!

朝になり神の言葉が気になって学校を休んでしまった

式「どうしよう?暇だ」

俺はあてもなくブラブラと歩いていたら黒猫に会った

式「かわいいな、猫かわいいよね」

撫でようとしたら避けられた……フ、死のうかな

式「夜一さんだったりして……ハハハ」

軽くショックになりながら歩き出そうとしたらさっきの黒猫がこっちを見て(殺気を出して)いた

式「え……本人??？」

黒猫「そうじゃ」

式「そうか本人か、じゃ!!」

黒猫「な!!待て」

俺は本気で走ってから500mくらい走って後ろを見ると……まだいる!!

黒猫「なかなかやるの」

式「クルナ」

そのまま浦原商店まだ全速力で走り続けた。もう無理っす

雨「店長。猫さんと両儀さん」

浦原「そうs……両儀さん？」

外に出ると本当に両儀さんが倒れていた。一体何があったんっすかね？

式「知らん……浦原商店だったな」

誰にもバレずに家に帰ろうとしたら浦原と夜一が話しを始めていた

浦原「どうしたんすか？夜一さん。雨でもきそうっすか？」

夜一「易い演技をするな喜助。わかっておるのだろ？奴らが来ておるぞ」

浦原「その話…ミルクの前と後とどっちにしましょう？」

夜一「そこにいる貴様もこい」

隠れている俺のほうを見て言う夜一さん……バレてたのかよ

式「帰っていいですか？」

夜一「まあ、今の段階ではいいだろう」

式「????、ではさようなら」

段階という言葉が気になったが今日の夜に朽木白哉と阿散井恋次がくるから準備したので急いで帰った

## 16話〜17話

あゝ、準備（食事）したのでルキアを探してたら石田と恋次が戦っていて……石田が負けた……ってハヤ！！

石田「あああ……」

恋次「ほぐら言わんこつちやねえ」

石田「ゴホゴホ……」

ルキア「（強い……こやつまた腕を上げている）」

恋次「さあて……そんじゃ止めといくか。死ぬ前に覚えておけ、阿散井恋次。テメエを殺した男の名だ」

ルキア「待て……」

恋次「ヨロシク……」

石田に止めをさそうとした瞬間、地面が砕け一護が現れた

恋次「何だテメエは……」

一護「黒崎一護……お前を倒す男だ。ヨロシク」

式「さあて手伝うぜ、一護」

恋次「また変な奴が出てきたな」

腰にアクセルドライバーを出しアクセルメモリを出現させスイッチを押しベルト挿す

『アクセル』

式「変……身!!」

『アクセル』

俺の体を熱気が被い赤い棒が出現し赤い棒が消えると仮面ライダーアクセルになった

恋次「姿が変わった!?!」

白哉「…ほお」

恋次は良い反応だが白哉は薄いな、もう少し驚いてくれ!!

一護「すまねえが俺がする」

式「(、;、;、)」「(、;、;、)」

一護「おらあああ!!」

一護と恋次が戦いが始まった……せつかく変身したのに俺の出番がくっと思っていると一護が負けルキアが処刑されることを聞かされた

式「これはヤバイかな」

石田「……」

石田の緊急処置をし終わると恋次が斬魄刀を始解して一護が攻撃をまともに受けていた

ルキア「!!」

式「俺の出番は？」

ルキア「一護!!立てるなら逃げる!!逃げるのだ一護」

一護「……」

恋次「どうした?来ないならこっちから行くぜ……!!?」

一護の霊圧が急激に上がり恋次の肩を少し斬った

恋次「な！！なんだテメエ！？」

一護「んあ！！」

ガードした恋次を吹き飛ばした、そろそろ俺も準備するかな

恋次「（なんだコイツ…さっきまで死に掛けてたじゃねえかよ！！どっからこんな力が湧いて出やがる！？）」

一護「ハ！！どうしたよ？えらく動きが鈍くなったじゃねえか、急によ！！」

恋次「（バカ言え！！テメエが早くなつたんだ）」

一護「なんでかわかんねえけどいい気分だ。今…傷の痛みもねえ…  
テメエに負ける気も全然しねえ！！」

恋次「くそ」

E 恋次を圧倒していく一護………トリアルメモリの準備はできてるZ

一護「ちょこまかと逃げるのウメエな」

恋次「（どうなってる…コイツの霊力はどこまで上がるってんだ！

「？」

一護「だが…それもここまでだ。フウン!!!」

飛び上がり恋次に斬りかかる

一護「アアアアアア!!!」

恋次「(重い…間に合わねえ)」

一護「ウオオオオリヤアアア!!!」

刀を振り下ろしたが恋次に傷はなく一護の刀の刃の部分が無くなっていた

一護「(な…何!?)」

ルキア「!?!」

一護「(斬魄刀が…違うこいつ(恋次)は何もしてねえ)」

一護は白哉の方を見て思考する……正解だぜ一護

一護「(アイツか?まさかあの間合いから何もできるはずがねえ…」

…!?!」

白哉の手には一護の刀の刃があった。刃を落とし白哉が刀に手を添える

一護「(くるか!?)」

白哉の方を向き構えた瞬間…白哉は一護の後ろにいた

一護&ルキア&恋次

「!?!」

式「さあ出番だZE」

一護が自分の体を見ると血が噴出し倒れた

一護「(なんだよこれ? やられたのか俺? 後ろから刺されたのか…前から刺されたのかもわからねえ…:…:)」

白哉「鈍いな…倒れることさえ」

ルキア「白哉兄様!!」

ザシユ!!!

一護に追い討ちをかけるように左胸付近を後ろから刺した

恋次「(久々に見た…やっぱりすげえ。かろうじて見えたのは二撃目だけ…一撃目は剣を抜いた瞬間も収めた瞬間さえ見えなかった)」

式「全て…振り切るぜ」

『トライアル』

アクセルメモリも抜きタイムウォッチ方のメモリをアクセルドライブバーに挿す

『トライアル』

『ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピー!!!』

蒼い輪が式の包み下から上へと移動する……そこに仮面ライダーアクセルトライアルが現れた

白哉「ほう……姿が変わるのか」

式「ハアアア!!!」

白哉に殴る蹴るの攻撃をするが全て外れる………どんだけ早いねん!!

恋次「なんて速さだ」

白哉「この中では一番速いな」

くそ!!…どんだけ強いんだよ………もうマキシマムドライブしかないな

式「見せてやる…トライアルの力を!!」

トライアルメモリを抜きマキシマムスイッチを押す………するとトライアルメモリの画面に数字が現れ計り始める

式「ハアアア!!!」

白哉&恋次&ルキア

「!!!」

音速の世界に入った俺は白哉に殴り続けながら一護を動かし逃げる準備をする

白哉「小賢しい」

俺の攻撃は全て防御される。全て外れるよりはマシだなと思いつていると10秒になりかけていたので一護を担いで石田の所へ移動しマキシマムスイッチを押す

『トリアルマキシマムドライブ』

式「9・9秒……危なかった」

10秒きると変身が解けることを覚えていてよかった。こっからどうしようか……

白哉「少しはやるようだな」

式「少して……こっちは全力なんだけどな」

ここは戦略的撤退としよう。別に逃げるわけじゃないんだからね!!

式「振り切る(逃げる)Z E」

もう一度トリアルメモリのマキシマムスイッチを押す

『トリアル』

式「ウオオオオ」

白哉「こい」

俺は白哉に一步だけ白哉に向い後ろに置いた石田と一護を担いで浦原商店に向った（逃げた）

恋次「な！！逃げんな！！！」

白哉「まあいい、ルキアだけでも」

恋次「わかりましたよ、朽木隊長」

白哉たちはルキアを連れて尸魂界ソウル・ソサエティに帰った。俺は浦原商店の前でぶっ倒れていた

式「はあはあ、なんとかついた」

浦原「よくここまでくれましたね」

式「ああ、すごいだ」………

俺は最後まで言えずに気絶してしまった……って隊長クラスって強

すぎだろ！！反則じゃね！？

式「ここは……浦原商店か」

くそー！知らない天井だつて言いたかったのに……っと思っ  
て隣で一護と浦原がお話をしていた

浦原「10日間…私と命のやりあい…できますか？」

一護「あたりまえじゃねえか！！（雨が止んだ……気がした」

10日間か、ガンバレ一護。俺はのんびり高校生ライフを満喫す  
るぜ

式「ガンバレ、一護」

一護「！？」

浦原「そういえば式さん。あなたは強制です……」指名されてます  
から

式「（；。。（。；。；ナ、ナンダッテー！！」

一護「よかった。無事だったのか」

式「そこはツツコム所だぞ、一護!！」

夜「ニヤ〜」

式「だまらっしやい!!!!!」

18話〜20話

一護と恋次と白哉の戦いが終わった次の日である

一護「俺は今……学校にきている実感がねえ。尸魂界の奴らに滅多うちにされて死にそうになったこと。今ここにあいつ（ルキア）がいないことも」

式「（ルキアのことを全員が忘れてるな）」

一護「（これが尸魂界に帰るってことか…消えるんだ…この世界からも…人の心からも。あいつの存在した事実の全てを消えて無くなってしまう…真っ白に）」

一護の顔が（、）になつとる……精神的にダメージがキテルな

先生「さて」と以上かな連絡事項は…それじゃ、あんた達9月まで死ぬなよ、以上。解散」

いつの間にか夏休みには入った……石田は結局休んでしまった

浅野「夏といえば海！！海といえば夏！！というわけで私<sup>わたくし</sup>浅野啓吾は明日より10日間海への合同合宿を提案する者であります」



式「そういえば織姫が一護を追いかけていったな」

俺は家にまつすぐ帰っている間に一護と織姫がシリアスなお話をしていた

式「そうして次の日である」

早いと言わないでくれ。ただやることがなかったただけだから

式「夏休み1日目は買出しだな」

一人暮らしで重要なのは食べ物だよ、最近まとめ買いしてなかったからしないと食事ができなくなる

一護「おお、式じゃねえか」

式「あゝ一護か」

なぜここで会う？俺は逃げ切る予定だったのに……

一護「おまえも来るか？」

式「俺は遠慮s……」

浦原「お！！ちょうど二人いますね」

なぜこのタイミングでやってくるんだよ浦原！！この疫病神め！！！！

一護「ちょうど？」

そこで聞くなー一護！！そうすると逃げれなくなってしまっじゃないかー！！

浦原「では行きましょう」

式「無理だった」

一護「どうした？」

式「気にしないでくれ」

浦原と一緒に地下の巨大空間についた。織姫とチャドも夜一と訓練を始めた

式「なんというか涙さんって怖いね」

涙「え!!、すみません」

式「いや…謝られても困る」

実際に見るととても強いし怖いな。ガンバレ一護…南無…っと思っ  
ていると一護のレスナーが終わっていた

浦原「では式さんも!!」

一護を分離させた杖で俺をつく……が魂と肉体に分離しない

浦原「……あんた何者っすか？」

一護「どうなっただ？」

式「俺が知りたいわ」

浦原「まあしかたない、そのまま涙と戦ってください」

式「力を使うのは有？」

浦原「まあいいでしょう」

よかった。力なしでいくと絶対100%負けるからな

式「変身!!」

腰に変身ベルト・アークルを出現させ仮面ライダークウガ・グロ  
イングフォームになった

浦原「へえそんな姿にもなれるんっすね」

式「え〜とお願いします」

俺はまずは挨拶をするべきだと思ったから挨拶をしたんだが……

涙「……」

式「グホオ!!」

殴られましたよ………礼儀つてのを知らないのか!? 吹き飛ばされつ  
つ体勢を立て直して涙を見る

式「ええい!!」

涙「・・・」

額に向けて殴っていたが全て避けられた。ヤケクソになって殴り続けたら……涙の頬に傷をつけてしまった

涙「!!!??」

式「ggなdがndgg!!!!」

ボコボコにされ(20発ほど殴られ)蹴り飛ばされ壁に激突し前を見ると涙が迫ってきていた

式「ここで止めるだろ、普通!!」

浦原「あなたは普通じゃないっすからね」

式「それだけで!?!」

涙が殴りかかってきていたのでとりあえず殴りかかっていきっている拳に当たるように殴った

涙「!!!」

式「なんとか成功だな」

成功はした……手を見ると赤色に変わっていた。距離を取った涙を見て自分の姿を確認するとマイティホームに変わっていた

浦原「ほく、赤くなりましたね」

式「なんとかなるかも」

俺はさっきよりも速いスピードで涙に接近して額めがけて殴りに行った

涙「……」

すぐに冷静？になった涙は簡単に俺の攻撃を防ぎ腹を蹴りにきたがそれを膝で受け止め距離をとった

浦原「式さん、レスンクリアっす」

式「へ？」

俺はレスン3まであると思っていたから変な声を出してしまった

浦原「その姿なら死神と互角に戦えるってわかったっすからね」

式「そ…そうか」

俺は安心したがそれでいいのか!?!と心の中で思っていた

式「一護は?」

俺が涙と訓練(地獄)をしていて一護がどこに行ったのを見ていなかった

浦原「一護さんならそこですよ」

大きな穴を指して言った。レッスン2をしていることがわかったので休憩することにした瞬間……

ドガーーーーン!……!

式「うえ!?!」

大きい音がしたので起きると一護が死神化に成功していた

浦原「レッスン2合格つす。ではレッスン3といきますかね」

一護「ああ、すぐに終わらせてやらあ!!」

レッスン3が始まったのを見て俺は鉄裁さんに帰っていいか聞いた

鉄裁「まだいたのですか？」

式「(T T)」

俺は泣くのを我慢しながら家に帰ることにした

式「今日はもう寝る」

俺が寝てる間に一護が始解することに成功してレッスンを全てクリアしていた

神「起きろ、バカ」

式「バカって言うな!!」

あれ…俺って寝てたよな？ってかこの校長室の様な場所どこ？

神「私の部屋だ」

式「それで神様は何ですか？」

神「そうだな……」

\*\*\*わかったこと\*\*\*

姿を変えるごとに体に変化が発生すること

ブラックホールクライン機関・アークル（クウガ）・タキオンカフト粒子・フェイズソフトブリッ装甲が体に搭載されつつある

式「確実に人外になりつつある……！！！」

神「まあ、これでやっと死神と互角に戦える」

式「どんだけ死神強いんだよ」

本当は花火の場所のこともあったんだが……俺は呼ばれなかったんだ。携帯のアドレス交換しとけばよかった……!!!!

場所は変わって浦原商店の前

式「チャド、織姫……お前たちも行くのか？」

チャド「ああ」

織姫「もちろんだよ!!」

式「そうか」

夜「お主もきたか」

式「猫がしゃべってますな」

チャド「あまり驚かないな」

式「一度追い回されたからな」

軽くトラウマになってますからね

チャド「そ…そうか」

石田「やはり君もいるのか」

式「ダメなのか？」

石田「いや…心強いよ」

あれ？石田ってこんな素直だっけ？たしか…ツンデレだったはずだが……

浦原「おや、黒崎さん〜時間ピッタリっすね」

一護もどうやらきたようだ。チャドと織姫の参加にびっくりしていたが一番の驚きは……

「飲み込みの悪い奴じゃ。小僧！！この者たちの内秘めたる力の高ぶり気づかぬとは言わせぬぞ。しのごの言わずにありがとうと頭を下げる」

一護「ね…猫が喋った〜！！！！」

織姫「猫じゃないよ、夜一さんだよ」

石田「やはり驚くよな」

チャド「初対面だったのか…」

式「リアクションいいな」

浦原商店の地下に行って穿界門も潜り尸魂界に向った

浦原「任せましたよ、黒崎さん」

## 21話〜22話

穿界門に入った式です。今走っています

式「なぜこうなった……」

石田「どうなっているんだ？壁が追いかけてくるぞ。僕たちが走り抜けた所がどんどん崩れていく……」

夜一「振り返る暇があったら一歩でも進め。あれに吞まればお終いじゃぞ」

壁が崩れてきていて吞まれると死ぬか……ってこんな設定にするなボケ……！！！！

石田「ちょっとみんな……何か来ているぞ……何なんだコイツは……」

夜一「拘突じゃ……7日に一度しか現れぬ掃除屋が……何も今は出ずともいいものを……」

完全に幽霊列車の拘突が現れた……ってメツチャ速え……！！

夜一「とにかく逃げろ……コイツは恐ろしく速いぞ……」

式「あゝもゝ来んな!!」

ブレイバツクルを腰に出現させターンアップハンドルを引く

『Turn Up』

ドガアアアアン!!!

一護たち「ぎゃああああ!!」

式「うえええ!!」

吹き飛ばされてしまった…織姫の様になるとは不安だ

織姫「大丈夫?みんな」

石田「まったく酷い目にあつたな」

織姫「でもよかつたゝ誰も怪我がない見たいで」

夜一「良い訳があるか!!」

織姫の右目にヘッドバッドをくわす夜一さん

織姫「痛い(泣)」

夜一「お主ワシの話を知りたかったのか?!もしお主がやっていたらお主の命はなかったぞ」

一護「いいじゃねえか。助かったんだし」

夜一「まったく事の重大さをk…」

チャド「式がない」

石田「そうだね」

かなり吹き飛ばされてしまったが「どこぞ」?

式「みんな…いない」

まさか俺だけ一人ボツチなのか！？そんなバカな……

俺が落ち込んでいると南の方角から地響きが聞こえた

式「そこだな。待ってる！！」

もう一度腰にブレイバツクルを出現させ引く

式「変身！！」

『Turn Up』

光のゲートが自動で通過する…トランプ・スペードのライダー、仮面ライダーブレイドになった

式「行くぜ」

『Mach』

醒剣ブレイラウザーにカードをラウズ（通す）する、高速移動しながら音のした方に走り出す。俺がついた頃には一護と？じだんぼう

の戦いは始まっていた

じだんぼう  
？丹坊……身長988cm 体重999kgで。山のような巨軀。  
巨大な二本の斧を振るい、一振りホロウで虚三十匹を屠った事がある程の  
豪傑の持ち主

式「俺の出番が……orz」

石田「君は誰だ!？」

織姫「何言ってるの石田君…式君だよ」

チャド「……普通はわからない」

式「まあ、式です」

なんで織姫わかるんだよ、俺この姿になるの初めてのはずだ……。  
織姫のすごさに驚いていると一護とじだんぼうの戦いが終わりを  
迎えようとしていた

？丹坊「受けてみる!!おらの最後の技…万歳?丹打祭」

一護「悪りい…潰すぜ、その斧」

一護が斧を破壊しようとする……それを阻止すれば目立つ!!

ラウスアブゾーバーを腕に出現させカードをラウスする

『Absorb Queen』

『Fusion Jack』

身体の各部が金色のアーマーに覆われ、胸部にはスペードのカテゴリ「J」の鷲の紋章が刻印される

式「うおおおー!!」

ガキキイイン!!!

一護の攻撃を剣で止め？丹坊の攻撃を腕でガードした

一護&？丹坊

「!!!??」

石田「あの二人の攻撃を受け止めただと!!」

夜「ほう」

？丹坊「なかなかやるな、だがまだまだだべ」

？丹坊が再び攻撃をしようと斧を持ち上げようとする

式「斧を見てみる」

？丹坊「何を言ってるべ。バカなことを言うn……………」

？丹坊は自分の斧を見て驚愕する……………二つある内の一つが壊れていた

？丹坊「おらの…おらの斧が…！！壊れちまったただ…壊れちまっただ…（泣）」

号泣しだした？丹坊……………怖いな

石田「泣き出したぞ」

織姫「サイレンみたい」

式「まあ、一護が二つとも壊すつもりだったのを止めたんだから勘弁してくれ」

一護「な！！俺の責任にするつもりか！？」

一護「ここは犠牲になってくれ。君の犠牲は無駄にはしなから

？丹坊「なんて器のデケえやつなんだ（泣）」

一護のすごさ？に？丹坊は肩を持つ

式「助かった」

一護「いや目の前であれだけ泣かれたら慰めざるおえないっつか…」

？丹坊「それに引き換えオラは……ベソベソして〜男して情けねえ。完敗だ」

どうやら一護の器？のデカさに感服した？丹坊は西・白道門を通し  
てくれることを許可してくれ……途中で動作が止まった

一護「どうした？何固まったてるんだ？」

？丹坊「あああ！！！」

一護「誰だ？」

？丹坊「三番隊隊長……市丸ギン！！」

門を開けると市丸ギンがいました……死亡フラグですね、わかります

?丹坊「( )( ;。 )( )」

一護「誰だ?アイツ」

夜一「三番隊隊長……市丸ギン」

ギン「あらゝ、こらゝアカン」

カアアン!!ブシュウウウ!!!

?丹坊「ウウアアア?!」

左腕を斬られ片手だけで白道門を持ち上げている。なんとかギンの攻撃を刃先だが捕らえることができたので傷は浅い

一護「?丹坊!」

チャド&織姫&石田

「!!!!」

ギン「あかんゝ、門番は門を開けるために居てるのとちゃうやろ」

夜一「(うかつじゃった…あんな奴がここまで出てこようわ。い

くらコヤツらが強くなったとはいえ隊長クラスの強さは想像を絶する。今あやつと戦うことだけは…その最悪の筋書きだけは避けめばならん」

?丹坊「オラは負けたんだ。負けた門番が門を開けるのは当たり前のことだべえ(冷汗)」

ギン「何言ってるんや。門番が負ける時は死ぬんや」

?丹坊「(。。。。(」

ギイイイン!!!。俺の努力を評価してくれよ……

夜一「い…一護!?!」

一護「なんてことしやがるんだこの野郎!?!」

夜一「(それはこっちのセリフじゃ!?!)」

ギン「オモロイ子やな、僕が怖わないの?」

夜一「よせ一護。ここはまず退くのじゃ!?!」

ギンが少し離れた所で刀を抜いた。これはヤバイな

一護「なんだよ?そんな離れて…その脇差しても投げてるのか?」

ギン「脇差じゃない、これが僕の斬魄刀や」

言い終わるとこちらに振り向き刀を挿すよう動作をする。威圧がかなり強い…空気が重い

ギン「……神鎗」

ギンの刃がこちらに向って伸びてきた……俺は一護をの前に立ち受け止める

式「重い一撃だな」

一護「な…式！…くんな…！」

俺&一護&？丹坊を巻き込んで吹き飛ばされた

式「くううう」

一護「ガハアア…！」

？丹坊「うおお…！」

持ち上げていた白道門は重力に従い落ちていく

夜「しまった…門が!!」

ギン「バイバイ」

門が閉じられ周りを見てみると流魂街に隠れていた人たちが現れてきた。身構える一護たち……長らしい人が先頭に現れ歓迎してくれると言った

式「のんびり行こう」

一護「まあ、それもいいか」

?丹坊は織姫が治療してくれることになりチャドはインコの柴田と雑談。一護は一人屋根の上で考え、俺も一護の後ろで考えていた

一護「お前……あとどれくらい姿が変えられるんだ」

式「数え切れないな」

一護「……そうか」

夜になりみんなが集まり門から行くことをあきらめ違う方法で行くと夜一さんが言った…すると外から大きな足音が近づいてきた

岩鷲「あゝ！！どわ！！」

一護「な…なんだこいつ!？」

岩鷲の現れた所から猪が現れた

一護「うわ…猪。なんで!？」

岩鷲「テメエら俺様を知らねえってか？」

石田「知らないな」

織姫「知らないわ」

チャド「知らん」

一護「知りたくもねえ」

なんでこいつらはここだけ連携プレーがうまいんだよ!!!!

岩鷲「仕方ねえ、教えてやるぜ」

教えようとすんなよ、教えたいと素直に言えばいいのに

岩鷲「俺様の名は岩鷲<sup>がんじゆ</sup>。自称…西流魂街の深紅の弾丸にして自称…  
西流魂街の兄貴と呼びたい人14年間ナンバーワン。そして、自称…  
…西流魂街一の死神嫌いだぜ」

夜一&チャド&石田&織姫

「全部自称だ!!」

岩鷲が一護を外に吹き飛ばし戦闘…殴りあっているだけだが…

ピリリリリリ!!!

岩鷲の部下の背中にある時計?が鳴り出した

岩鷲「ガアアア、おい!!!何時だ!?!」

部下A「大変だ兄貴!!!もう9時だ」

岩鷲「まずい、カモンポニーちゃん」

岩鷲が猪を呼んだ

## 23話〜24話

ポニーちゃん(猪)に岩鷲が吹き飛ばされた

岩鷲「ゴフアアア!!」

飼い主が吹き飛ばされていいもんかな?っと思っていると岩鷲たちは部下たちとどこかに行ってしまった

岩鷲「タンポポみたいにフワフワ飛んで逃げんじゃねえぞ〜!!」

一護「な!!それはこっちのs……」

セリフだ!!っと言おうとした一護が部下たちにひき逃げされたのは言つまでもない

次の日になって俺と一護は部屋の中にいた

一護「(。( )ゴルア!!」

式「おいおい、早く行くぞ」

一護「先に行つててくれ、俺は昨晚の奴と決着をつけてから行く」

ルキアを助けるのを忘れてるな、よし……ソイ!!!

一護「ガアア!!!」

頭をオモイツキり殴りつけた、床にめりこんだのは見てないことに  
する

一護「何するんだ、こらあ!!!」

式「ルキアを助けるんじゃないのか？」

一護「わかってるよ」

なんだかんだで志波空鶴はし かづくの所に行くことになった。？丹坊は豪快に  
寝ていたので大丈夫と判断したので放置した

一護「なあ、本当にこつちであつてんのか？」

石田「うるさいな、長老からもらった地図ではこの辺りなんだよ。  
文句があるなら君が先頭を行けばいいだろ!!!」

夜一「案ずるな、奴は住む場所はコロコロ変わるが家だけはいつも  
同じような物を造る。わしが見れば一目でそれとわかる」

式「変わった人だな」

チャド「ああ」

歩き続けて5分が経過した

夜一「お、見えたぞ…あれじゃよ」

一護「こ……!!」

石田「これは…!!」

織姫「うわゝ、カッコいい」

チャド「…」

式「ありえね〜」

普通の家の形はわかる……だがなんだあの造形物は!?家の前に20mほどの大きさのある腕って!!しかも旗に志波空鶴と豪快に書いてるし誰が見てもわかるわ!!!

夜一「な、一目でわかるじゃろ?」

一護「これは一目でわかるかどうかという以前の問題だ!!」

石田「人気のない所が好きとかいうのも、たぶん嘘だ!! あんな家建てちゃうから町中に住まわせてもらえないだけだ!!」

一護「絶対そうだ!!!」

一護に石田、お前たちの気持ちはわかる。俺だって原作知らなかったら軽く現実逃避してしまうだろうからな

夜一「今回の旗持ちオブジェは人の腕か…なかなか良いデキじゃな」

一護「毎回あれ…モチーフ違うの?」

式「驚きすぎだ、二人とも」

一護「驚かないほうがオカシイぞ!!」

石田「ありえない…」

入る前に変な門番に止められ夜一さんの顔パスで通るところができた……猫の姿で顔パスって信じられん。家の中に入ってすぐに地下への階段を降りてドアを開けるとそこには女の美人がいた

空鶴「よお、久しぶりじゃねえか夜一」

一護「空鶴って…」

織姫&チャド石田&式

「オンナ〜?!?!」

夜一「誰も男などと言っておらんぞ」

浦原とは昔馴染で織姫以上に巨乳で容姿端麗。性格は豪快で荒々しい言葉遣いをし、言葉より先に手が出る。姉御肌……と言う電波を受信した

名前から女なんて思わないよな、普通

空鶴「なんだ?そのガキどもは」

夜一「実はのう空鶴…」

二人がアイコンタクトだけで事の重大差を空鶴は感じ取った

空鶴「厄介ごとか……いいぜ。面倒ごとは大好きさ!」

式「変わってますね」

空鶴「なんだとこらあ!」

式「すいません」

面倒ごとが大好きって頭がオカシイのかこの人は……。話は進み了承してくれた、しかし俺たちは信用されてないので手下がつくことになった

一護「手下？」

岩鷲「初めまして志波岩鷲と申します、以後お見知りおきを……」

式「あらま」

一護&織姫&石田&チャド

「（。。。）ポカーン」

一護&岩鷲「あゝ……!!」

顔合わせるとすぐに喧嘩が始まった。部屋の全ての扉が潰れたり一護が急所蹴りをくらったり空鶴のパイプタバコが壊れたり……。ヤバいな

空鶴「てめえら……ウオオオオオオ!!」

俺は左腕だけを仮面ライダークウガ・タイタンフォームにして空鶴の拳が地面に当たるのを防いだ

夜一「ほう」

空鶴「へえ、やるじゃねえか。お前……俺のもんにならねえか？」

式「（・・）エッ？」

夜一「空鶴、そいつは男じゃぞ」

空鶴「そいつはいい……鍛えれば将来いい男になるかもしれねえ」

式「（；・）ハッ？」

空鶴「まあこの話はあとだ、お前らついてこい！..」

受け止めた腕が痺れている、どんだけ強いんだよ。なぜか冷や汗が止まらないのは気のせいだと信じたい

空鶴に連れられてまた地下への階段を降りるとそこは長い廊下だった

石田「すごいな、地下なのに明かりがついているなんて」

驚き続けている石田を流し続ける空鶴。歩き続けて一つの扉についた。扉には関係者以外立ち入り禁止と書いていた……なんで赤い字？

空鶴「ここだ、開ける岩鷲」

岩鷲「は…はい〜!!」

中に入るととても広い部屋で真ん中に大きな柱?があった。そこには柱?だけで他は何もない鉄の部屋だった

一護「何なんだ、こりゃあ!?!」

石田「デカイ」

空鶴「こいつでテメエらを尸魂界の中にぶち込むのさ。空からな」

一護&石田「空!?!」

めっちゃ面白い顔するな石田に一護。リアクションがランプリがあったら一位間違いなしだなと思っていると空鶴がカツコつけてこちらに振り返った

空鶴「俺の名は志波空鶴。流魂街1の花火師だぜ!?!」

一護「花火師?」

空鶴「金彦、銀彦…上げる!?!」

空鶴の合図で地上に出てきた。金彦さん、銀彦さん…顔が怖いです

空鶴「どうだ？驚いたか？」

石田「こんな時に何の冗談を言ってるんです？花火師か何だか知らないがそんな物で僕たちを打ち上げるなんてどうかs……ゲフン！」

石田の顔にボール？が激突した。ボールは霊珠核という物で霊力を込め周りに膜を作り身を守る物らしい

空鶴「お前らがこの玉に霊力をこめれば壁をぶち敗れる砲弾ができる。そいつを花鶴射法で打ち上げて一気に内部に突入するって寸法だ」

理屈がわかったがとても無理のあることだと思つのは俺だけなのか？

空鶴「何か質問ある奴？」

一護「あ…あn……」

誰の質問を聞かずに金彦と銀彦に連れ去られてしまった……俺以外。空鶴と岩鷲がシリアスな雰囲気を出している所……理由を聞いてしまった

空鶴「今の話……聞いたのか？」

式「ギク……何のことでしょう？」

空鶴「お前だけ特別訓練をしてやる。ついてk……」

式「失礼しました〜!!!」

空鶴「…っち、行きやがった。まあいい、時間はまだある」

連行される前に一護たちのいる所に逃げきった俺は安堵しつつ、嫌な予感がしてならなかった

一護たちと一緒に訓練をやり始めた

金彦「あい、どうぞ。織姫殿」

織姫は簡単に膜を張ることができた……完璧な丸だ!!!

金彦「お〜!!!なかなか筋が良いですぞ」

銀彦「では石田殿」

石田の膜はラグビーボールの様な形になっていた

銀彦「豪く細いが形にはなってますな」

金彦「ん〜、これはオソラク性格的なものが原因ですな。次…チャ  
ド殿」

丸にはなっているが……膜がやたらと振動している

金彦「これは!!!やや不安定ながらパワフル。次に式殿」

式「よし!!!」

俺は霊珠核に霊力を込める……とてつもなくデカイ虹色の膜ができた

金彦「ありえない?!こんなことが……」

銀彦「空鶴様に報告しなくては……」

銀彦がヤバイことを言っていたがこの時、俺は感激していたので聞き逃していた

金彦「次……一護殿」

一護「ウラアアアア!!!」

一護の膜は……へニヤへニヤだった。おいおい、なんでそうなんねん

金彦&銀彦

「これは酷い。いや全く…何ですかこれは?才能がないとしか思えませんが…!!!」

二人のドアップで言われた一護は霊珠核を銀彦にぶつけ二人をフルボッコにしていた。ちょうどご飯ができたので食事を取った

練習場で一護が膜を張ることに成功して気を抜いてしまい割れて自爆した。その余波で家が潰れるのを仮面ライダーブレイドになりシ

ールドカード（オリジナル）を使い潰れずに済んだ

そのせいで余計に空鶴に気に入られてしまったのは言うまでもない

\*\*\*俺の夢の中\*\*\*

式「またここか」

神様の書斎部屋にいた。見た目は普通の書斎だな

神様「やあ、君には渡す物があつてね」

式「何ですか？」

神様「まずモンスターハンターのアイテムセット、T2ガイアメモリだ」

おお、回復アイテムは助かるし仮面ライダーエターナルになることもできる。問題はどうかやって大量のアイテムを持つのか？とT2がアイテムの性能だな

神様「まずアイテムはこの無限ポーチを使え。T2がアイテムの性能はT1がアイテムの4倍で全てが純正」

式「ご都合主義だな」

神様「これからの戦闘ではこうでもしない限り負けるからな」

式「( ;。・。・ )」

神様「まあアークルも搭載されたからなんとかなるかもしれないが保険もかねてな」

どんだけ強いんだよ隊長クラス……。まあくれるならもらうさ

神様「ではガンバレよ」

俺は書斎から弾き飛ばされてしまった

25話〜28話(前書き)

今回は短いです、かなり適当になってしまいました、すみません

25話〜28話

一護が膜を張ることに成功した後、一護は寝てしまいその間……暇だったのは言うまでもない

外に出て待っていると一護がやってきた

一護「そういえば夜一さんは砲弾作れるのか？」

夜一「あ〜どうだかな。どれ？やってみるか」

石田「もしかして今が初めて!？」

夜一「まあ、それをそこに置いてみる」

霊珠核の上に乗る簡単に膜を張ってしまう

織姫「うわああ、すごい夜一さん!!」

式「さすがだな」

夜一が簡単に膜を張ることができたのを見て一護がorzのポーズをしていた。そして砲台の中に入った

空鶴「彼方…赤銅色の強欲が36度の支配を欲している…72対の幻…13対の角笛…猿の右手が星を掴む」

空鶴の左腕が燃え上がり地面を殴ると炎が砲台を囲む。右腕と言っておいて左腕なのかは謎である

空鶴「25輪の太陽に抱かれて砂の揺籃ゆりかごは血を流す」

炎は空鶴の腕へと戻ると砲台に付いていたしめ縄？を切った

空鶴「花鶴射法二番…かきとび拘吠！！！」

ドゴオオオン！！！！

豪快な音とともに俺たちは打ち上げられた

瀨霊廷の上まで来て見えない壁にぶつかり中には入れたが霊珠核が割れた

飛んでいる途中で岩鷲が第二段階に移行するべく術を言っていたが一護のせいで移行できなかったため霊珠核が割れてしまった……回

避することができなかった

一護「どうなったんだ？通り抜けたのはいいけど何で地面に落ちねえんだ！！」

式「（お前のせいだ！！）」

夜一「離れるな。今はシールドにぶつかった砲弾がとけて一時的に絡み付いているだけじゃ！！」

石田「ということは……」

夜一「時期…渦を巻き消滅する」

織姫「えええ！？！？」

夜一「その時に離れておつたら衝撃でバラバラに飛ばされる！！」

言い終わるとすぐに渦を巻き始め一護と岩鷲&夜一ペアと織姫とチャドと俺ペアに別れた……あれ、石田だけ違う所に飛ばされて渦から外に出てしまった

チャド「く！！」

石田を追いかけたチャド……って危ないじゃないか！！俺は腰にダークキバットベルトを出現させる

式「変身!!」

ファンガイア族が作り出した最強の闇のキバの鎧を纏った戦士……  
仮面ライダーダークキバになった

石田「ウアアアアア!!」

一護「なんだその姿!？」

夜一「なんと禍々しい」

変身し終わった所でチャドは石田を捕まえて渦の中に投げ戻した

式「くそつたれ!!」

チャドが背中から落ちようとしていたのを予測しチャドの後ろに行き庇いながら落ちていく

チャド「無理するな」

式「大丈夫だ」

さすが最強の闇の鎧、まったく痛くない……めっちゃ燃えてるように見えるけどな

落下中の俺たち以外は別れないように奮闘していたが失敗してバラバラになっていた

式」……どうしよう」

チャド」どうしよう……」

無事に着地に成功した俺とチャドは移動を始めた。一護たちは弓親と一角との戦闘が始まり石田たちは逃走を始めた

まだらめ いっかく  
斑目一角、ハゲの死神

あやせがわ ゆみちか  
綾瀬川弓親、かなりのナルシストでまつ毛が変な死神

何度か斬りあい一護の実力に驚いている一角

一角「師匠は誰だ？一護」

一護「10日ほど教わっただけだから師と呼べるかどうかからねえけど戦いを教えてくれた人ならいる」

一角「誰だ？」

一護「浦原……喜助」

一角「!?!?、そうかあの人が師か。それじゃあ手を抜いて殺すのは失礼つてもんだ!!」

始解し鬼灯丸ほのおのたまのと刀は変化した。見た目は槍だが三節棍に変化することがができる

一角「驚いてる暇はねえぞ!!一護。行くぜ!!!!」

一護「こい!!!!」

激戦が開始した。石田たちは追いかけてっこをしていた

チャド「あれは!?!」

式「織姫たちだな」

チャド「見えるのか？」

式「ああ、行こう」

俺たちが移動場所を変更し織姫たちを探しに行った

一護と一角の戦いに決着がついた

一角「お前らの中で一番強いのは誰だ？」

一護「たぶん……俺だ」

何〜!?!?!、俺のことを忘れるな!!!

一角「そうか……だったらうちの隊長には気をつけな。隊長は弱い奴には興味はねえ……てめえの言うことが本当なら狙われるのは間違いなくテメエだ!!」

一護「強いのか？」

一角「会えばわかるさ。あの人の強さはテメエの頭が理解できるまでテメエが生きていられたらの話しだがな」

一護「そいつの名は!?!」

一角「十一番隊長……更木剣八」

俺の出番がないのは……気のせいじゃねえ!!!

式「活躍できね〜!!!」

チャド「そんなこと気にするな」

式「ガアアアアアア!!!」

チャド「!?!?!」

俺は高く高く空に飛び上がった

式「!!!見つけた」

俺は石田たちを発見した。着地し角度を変え再度ジャンプする

チャド「どこへ行く?」

チャドが何か言ってたが気にせずに石田たちのいる所に飛んだ

その頃、石田たち

慈楼坊「羽ばたきなさい劈鳥しんぱきがらす」

一貫坂慈楼坊いっかんざか・じろうぼう。身長231cmの護廷十三隊七番隊第四席、流魂街出身の巨漢で？丹坊の弟

慈楼坊じろうぼうが始解した所だった……キタゼ!!

織姫「あ!?!」

慈楼坊「どうですさあ後悔n……グホオ!!!!」

織姫&石田「な!?!」

式「しゃあアア!!」

慈楼坊の顔にドロップキックを決めると星になって消えてしまった

式「弱いな」

石田「君は……式か?」

式「ああ、この姿では初めてだな」

織姫「式君カッコいい」

式「それじゃ、チャドの所に戻るよ」

石田「ちょっと待って一緒にk……」

石田が何か言っていたが気にせずに飛びながら移動する

剣八「お、おまえが旅禍りょかだな」

式「（ ）。（ ゲツ！！」

おいおい、一護が最初に会つたる普通……！！

剣八「まあいい、俺の相手をしろ」

式「嫌です」

こいつとやって無事にいれるはずがねない……逃げるが勝ちだ

剣八「おいおいどこに行くんだよ」

簡単に回り込まれらよ、逃げれなね、もうヤケクソだ!!!!

式「行きます」

剣八「こい!!!!」

俺は殴り続けるが全て刀で防がれてしまう

剣八「なんだこいつは残念だな」

ズシャアアア!!!!

俺は剣八の攻撃を受け壁にめりこんだ

式「ガハアア!!!!」

剣八「終わらせるか……」

ウェイクアアップエッスをセットし2回吹く

剣八「ほう、何かするか」

キバット「II世「Wake Up」？」

式「ウオオオオ!!!」

飛び上がり剣八に向って必殺飛び蹴りをする

剣八「こい……ガハアア!!!」

式「よし、逃げる」

剣八を壁にめりこまし仕返しできたので逃走した

剣八「なんだやるじゃねえか……っていねえな」

なんとか逃げ切ることに成功したのだが迷ってしまった。変身は解除した……ずっと同じだと楽しくないからな

式「みんなどこだよ」

マユリ「見つけたよ、旅禍」

ネム「……」

十二番隊の涅マユリ（くろつち・マユリ）と涅ネム（くろつち・ネム）だった

式「なんでお前なんだよ……！」

俺の声が瀟霊廷に響き渡った……のちにこれが原因で隊長クラスと出会ったのは言っまでもない

29話〜31話(前書き)

話が短いです

29話〜31話

十二番隊の涅マユリと涅ネムに会ってしまった俺は困った

マユリ「さあ大人しく捕まりなさい」

ネム「……………」

男の人？横にいる女の人〜お願いだから喋ってくれ！！こんな奴と話しをしたくない

式「いやだね、お前に捕まると実験とかに使われそうだからな」

マユリ「ほう、よくわかったね。最近、暇だね。研究材料がほしかったところ所なんだ」

やっぱりか！！めっちゃオカシイ人？に見えてるからな…というか耳がねえ？！

式「このキモキモ妖怪が！！」

マユリ「なんだと！！はしゃぐなザコが！！！！」

式「ザコじゃねえ……………変身！！！！」

『 HENSHIN 』

俺は即効で決めるため右腕にザビーを出現させ仮面ライダーザビーになる

マユリ「ほう変わった力をもっているね」

式「最初からクライマックスだぜ、キャスト・オフ!!」

『 CAST OFF 』 『 CHANGE WASP 』

マスクドアーマーをマユリとネムに向けて飛ばす

マユリ「コザカシイ」

ネム「……………」

斬魄刀で簡単に防ぐ二人。やっぱり隊長クラスは違うな

式「いくぞ」

マユリ「ネム…手を出すな」

ネム「わかりました」

俺は殴り続けるがマユリは楽々と刀で防ぐ

マユリ「少しはやるようだが弱いね」

式「これでも強いほうなんだけどな、クロックアップ!」

『CLOCK UP』

超高速の世界に入り急所に一撃、顔に二撃、足に三撃と殴る。マユリは見えない攻撃に焦りただ立ったままになっていた

簡単に背後に移動し殴り続ける、アタタタタと言いたいくらいに……

マユリ「グホオ!」

ネム「マユリ様!」

式「これで終わりだ!」

ゼクター「ニードル上部のフルスロットルを押す」

『 Rider Stinging 』

右腕にあるザビーゼクターが光って右腕に波動に変換したタキオン粒子がに集中する

マユリ「ザコの分際で卍k……ギャアアアア!?!?」

ネム「マユリ……キヤアアアア?!」

卍解する前にライダーステイングを当てネムを巻き込み壁を貫通してどこかに消えてしまった

ちっ!! 爆発すればよかったのに……今はルキアを助けるのを優先するからな。予定がなかったら完全に息の根を止める所だ

S I D E 涅マユリ

私は目の前に現れた旅禍を見て笑みを浮べてしまった。最近私を  
充たすものがなくイライラしている所だったからね

マユリ「さあ大人しく捕まりなさい」

式「いやだね、お前に捕まると実験とかに使われそうだからな」

顔に出ていたのかね？まあいい、私を失望させないでくれたまえよ

式「このキモキモ妖怪が！！」

私が…この私が妖怪だと！！絶対に実験材料にしてやる

マユリ「なんだと！！はしゃぐなザコが！！！」

式「ザコじゃねえ……変身！！！」

旅禍が何か言ったあと旅禍を包むように金属？が出現し完全に包み  
込み姿が変わっていた。これは捕獲する理由が増えたね

マユリ「ほう変わった力をもっているね」

式「最初からクライマックスだけ、キャスト・オフ！！！」

『CAST OFF』 『CHANGE WASP』

奇妙な声と同時に旅禍の鎧がこちらに飛んできた。こんな低脳な攻撃で私は倒すことはできないよ

式「いくぞ」

マユリ「ネム…手を出すな」

やっとマシな攻撃を仕掛けてきたね。副隊長とギリギリ引き分けに持ち込めるほどだ、旅禍でこれほどの力を持つとは…ますます欲しくなってしまったよ

マユリ「少しはやるようだが弱いね」

式「これでも強いほうなんだけどな、クロックアップ!!」

『CLOCK UP』

また奇妙な声が聞こえたので構え警戒だけはしていた。しかし、まったくもって無駄な行為になってしまった

マユリ「グホオ!？」

ネム「マユリ様!？」

何だ!? 一体何が起こったというのだ!? 急所に1回、顔に2回、足に3回殴られた……ほとんど同時に!!!。私は呆然と立ち尽くしてしまっただ

式「これで終わりだ!！」

まだ何か仕掛けてくるというのか!? こんなザコに私が負けるとい  
うのか!?!?!?

マユリ「ザコの分際で卍k……ギャアアアア!?!?!？」

ネム「マユリ……キヤアアア?！」

私は卍解しようとして斬魄刀に手を添えた所で激痛が走った……どうやら殴られた?らしい。ネムを巻き込み壁を何枚も当たってはぶち破  
つて次の壁に行く

ここまで私をコケにするとは……絶対に生かしておけん!!!

S I D E 式

俺がマユリとの戦いが終わった頃、一護と恋次の勝負が始まっていた

式「間に合ってくれよ!!!」

俺は変身したまま走り続ける、クロックアップをしてはやめてを繰り返して距離を縮める

一護「待たせたな恋次……覚悟。テメエを斬るぜ!!!」

一護の表情が変わる。瞳の色が茶色から輝く蒼に変化し霊圧が上がった

恋次「なんだコイツ!?あの時と一緒か……いや、あの時は滅茶苦茶に霊圧が暴発してただけだ。だが今は静かに抑えられている、そしてはるかに……強い!!!」

一護「ウオオオオオオ!!!」

恋次「くっそ〜!!」

恋次は斬魄刀を斬り上げるが避けられ横に斬るが防がれ……そして弾かれた

一護「攻撃するなら……斬る!!!」

俺が見た時には一護が斬りかかる所だった。そんなことはさせない、斬魄刀が砕けるのは辛いからな。それに恋次を説得（OHANAS I）すれば仲間になるかもしれない

式「クロックアップ」

『CLOCK UP』

超高速の世界に入る。これ以上クロックアップをすると肉体がもたないから速攻で決める

式「ライダーステイング」

『Rider Stinging』

右腕にあるザビーゼクターが光って右腕に波動に変換したタキオン粒子がに集中する。そして時は動き出す

一護「ハアアア!!!」

恋次「ラアアア!!!」

式「アアアア!!!」

ドガアアアアアアアアアア!!!

一護と恋次は後ろの壁に激突、俺は上空に吹き飛ばされた

式「くっそが!!!ここどこなんだよ?」

俺は周りを確認するために少し移動を始める。その頃、一護と恋次は二人とも気絶して花太郎に治療してもらっていた

やまだ はなたろう  
山田花太郎：身長153cm、鬼道を治癒に使える。真面目な性格だが、天然でヘタレ気味

式「かなり一護たちと離れてしまったな」

剣八「見つけた!!!」

式「( ) 。 。 」

剣八に見つかり再戦（強制）をすることになった式。マユリは自分の研究室で怪しげなポッドに入り治療をしていた

32話〜34話(前書き)

お久しぶりです

大学が始まり忙しくなり更新が遅れました。できるだけ一週間に一回は更新しようと思います

33話はカット&文が短いです

### 32話〜34話

一護が恋次の斬魄刀を破壊するのを防いだが吹き飛ばされてしまった式。一護たちの所に移動しようとした時、剣八と会ってしまった

剣八「さあ、やりあおうぜ!」

式「わかった」

式は腰にカイザドライバーを出現させ、手にカイザフォンを出し913と押しドライバーに挿し込む

式「変身!」

『Complete』

機械音とともにドライバーから光が式を包むように出現し一瞬強く光るとギリシャ文字の を模したデザインの仮面ライダーカイザが現れた

剣八「ほう、また違う姿か…… いいね!」

式「いくぞ」

カイザブレイガンにミッションメモリを挿し Blade Mode を起動させ剣八の刀とぶつかりあう

ギイイーン!!! ギイイーン!!!

剣八「これが俺の待っていた瞬間だ!!!」

式「!?!?!」

眼帯を外した剣八、すると急激に霊力が上がっていく。剣八の口が不気味に笑った

式「ちいいい、はあ!!!」

剣八の圧倒的な霊力を見た式はためらわず攻撃を再開する

式「はあ、おおお!!!」

剣八「こんなもんか、あああ!!!」

斬りかかるが斬っても斬っても剣八の体に傷跡ができない

剣八「こんなもんかよ…… らああ!!」

式「ガアアア!!」

剣八に斬られた。たった一撃なのに式の意識は朦朧とするほどのダメージをくらっていた

剣八「ちっ、こんなもんかよ」

式「こんな…… こんな所で俺の出番は終わらね!!」

式が吼えると体に変化していく。胸、肩、腕、足、体が全体的に大きくなった。見た目はS・I・C VOL30の仮面ライダーカイザ

剣八「ほう、まだまだ楽しませてくれるか？」

式「ええい、どうにでもなれ」

カイザショットを手に持ち替えメモリをセットし、ENTERを押す

『Exceed Charge』

機械音が鳴りカイザショットにエネルギーが充電される

式「ウオオオ、グランインパクト!!!」

剣八「グハハアア」

式の攻撃を避けようとはせず真正面から受けた剣八は吹っ飛んでいった

式「ハア、これで倒したよな？」

不安に駆られる式だがすぐにでも一護たちの所（一番乗りするため）にジャンプしながら最短距離で進み出した

その頃、一護は花太郎に治療され剣八は四番隊で治療されていた

花太郎「あつ、目が覚めましたか？」

一護「き…傷？　そうか、恋次と戦って。大丈夫だ、みんなに知らせないと……」

フラフラになりながら歩いて進む一護を岩鷲がぶん殴って気絶させた

花太郎「岩鷲さん！！ あゝあ、また怪我が増えた」

花太郎は一護を引きずりながら怪我が見やすい所に一護を移動させる

花太郎「本当、岩鷲さんは手荒いな」

岩鷲「いいだろ！！ ちゃんと止めたんだから」

再度、一護の容態を見て花太郎は思った

肩から胸にかけての傷が浅い…… 懐に入っていた仮面のおかげで傷が深くならなかったのだと。しかし、阿散井副隊長の攻撃を防ぐなんて一体何なんだ？

それにこの仮面は虚ホロウに似すぎていると……

剣八が倒されたことにより一護と剣八の勝負が無くなった。早朝、涅マユリは完全回復していた。どうやらカプセルはドラゴンボールのカプセルと同じ？物だったようだ

雛森桃ひなもり ももが会議に遅れそうだったので走って移動していた。そして見  
てしまった…… 壁に貼りつけられ血まみれになっている藍染惣右  
介すけを……

桃「キヤアアアア！！！」

吉良「な！？ 嘘だろ……」

松本「そんな…… ありえない！！！」

桃の悲鳴で副隊長全員が集まり、血まみれの藍染を見て驚愕していた

犯人は当然、旅禍（俺たち）だと思われた。恋次を倒した一護では  
なく剣八に重傷を負わせた俺になっていた

35話〜38話(前書き)

主人公をボコボコにするはずが……

35話〜38話

藍染惣の死亡？を見ていた副隊長たちの前に市丸が現れ、雛森が暴走し斬りかかるも吉良に阻止されてしまう

雛森「どいて吉良君！！」

吉良「退かない！！」

二人の斬魄刀が激しく押し合う中、雛森が斬魄刀を始解し吉良は少しダメージを負う

吉良「君がそのつもりなら君を…… 排除する」

飛び上がり斬魄刀を始解して斬りかかる吉良、それを迎えうつ雛森が吉良に斬りかかる

日番谷「まったく二人ともやめろ」

二人の斬撃を簡単に無力化したのは十番隊長の日番谷ひつがや 冬獅郎ふゆしろうだった。彼のおかげで騒動はおさまった

通路で立ったまま寝ていた俺は雛森の悲鳴によって目が覚め……  
体勢を崩して倒れてしまった

式「なんだ？ 今の悲鳴」

まったく、目覚めの悪い朝だなと思いつつながら俺は走り出した。チャ  
ドがいる方向に向っているとは知らないまま……

一護たちはルキアのいる場所に近づいていた

一護「もう少しだ、行くぞ！！」

岩鷲「おう」

花太郎「ええ」

一護たちの前に小さなピンク色の髪をした少女が現れた

一護「お… おまえは!？」

草鹿「剣ちゃんの変わりにきたよ」

岩鷲「はあ!？」

花太郎「え!？」

草鹿「よろしくね」

本来は更木剣八が一護の相手をするはずだったが草鹿やちるが相手をしにやってきた、緊迫感のないままに……

そのころチャドと京楽（#）春水（しゅんすい）の戦いが始まりボンボンと壁を壊して  
いた

式「なんだ？ 今の音は！？」

俺は胸騒ぎを感じファイズドライバーを腰に出現させ、ファイズフオンを555と押しベルト挿す

式「変身！！」

『Complete』

機械音が鳴り仮面ライダーファイズになる。すぐにアクセルメモリーをファイズフォンのプラットフォームに挿入

目の色が黄土色から赤紫色に変化し胸のパーツが肩に移動する。そしてアクセルフォームに姿を変えた

式「間に合ってくれよ、チャド」

クラウチングスタートの体勢をとり、スタータースイッチを押す

『Start Up』

式「ウオオオオオ」

超加速モードになった式はチャドの霊圧（壁を壊す音）を頼りに走った

式がついた時にはチャドが血まみれで倒れている所に二人の死神がいる所だった……

式「チャド……!!!」

京楽&伊勢「!?!」

完全にブチギれた式は無意識にブラックホール機関とフェイズシフト装甲を発動していた。カイザの時と同様に肉体が少し大きくなり目の色が黒になった

京楽「ほう、手間が省けて助かるね」

七緒「ええ」

中年のおっさんの横に眼鏡の女性、伊勢 七緒がいるのを確認するとおっさんに向かって動く

京楽「な！？ ガハアア！！」

本来、アクセルモードは10秒しか持たない。だが……今の式は確実に10秒以上アクセルモードでいる。動きも桁違いに速くなっている

伊勢「隊長！？ このお！！」

七緒が式に斬りかかるも簡単に避けられる

七緒「いったいどこに？」

式「そこで黙ってる」

式はファイズポインターをセットしファイズフォンのENTERを押す

『Exceed Charge』

七緒「！？ 動けない」

京楽「七緒ちゃん！！ 調子に乗りすぎだよ！！！！」

京楽が目にも見えない速さで斬りかかってくる。しかし、斬る瞬間…… 残像を残して式の姿が消える

京楽「そんな…… !?!?」

体勢を崩した京楽に殴った式。その一撃は京楽の体を地面に5mほど埋める力を持っていた

七緒「隊長?! よくも…… ガア!?!」

京楽を沈め、七緒の腹を殴り気絶させた。この場面を裏廷隊という情報伝達を行う部隊の一人が目撃し即座に隊長格に連絡されてしまった

式「…… は!! チャド」

式はチャドの所に行き安否を確認する。なんとか生きていることを知りポケットから回復薬グレートを取り出しチャドに飲ませる。傷が塞がりチャドの顔色がよくなる

式「すごい効力だな。しかし…… この二人どうしよう?」

今だに地面に埋もれている京楽と床に倒れている七緒。京楽を掘り出し回復薬を飲ませ、七緒に回復薬グレートを飲ませた

二人の顔色はよくなりスヤスヤと寝ている。なぜ七緒にだけ良い薬を飲ませたかは……　なんとなく（女性だから）だ

そのころ、一護は草鹿にボコボコにされブスリと刺されてぶっ倒れていた。しっかりしてくれ一護

39話〜41話(前書き)

短いです

文才がほししいい!!!

主人公が規格外になっていくー!!!

39話〜41話

スヤスヤと寝ている三人を見ている式

式「どうしよう……」

治療は成功しているから死ぬ心配はないけど、ここにおいて置くのは……  
ダメだよな、やつぱり

式「そういえば…… ツハ!」

式は思い出した。一護が二回戦をしているってことはルキアの所に岩鷲たちがもうついていることを……

式「俺がガンダム…… じゃなくて主人公だ!!」

アクセルフォームのまま移動をする式。制限時間がくる様子もなく体がとても軽いことに驚きつつも朽木白哉の霊圧を機械で探し出しジャンプしては走ってルキアを助けに動く

式が行って少ししてから京楽が目を覚ましチャドと七緒を四番隊の所に運んでいた

そのころ、岩鷲たちはルキアと会うことができ脱出する所を白哉に見つかり混乱していた

白哉「四深牢へのわずかな霊圧の移動を感じたのでどんなツワモノが霊圧を潜めて潜り込んできたと思いきや、ムシか」

ルキア「やめろ、お前では勝て!？」

急に床に手をつき、辛くなるルキア。四深牢に長くいた影響で体がついてきていない

そんなことも知らない岩鷲は攻撃をしようと動いた時、白哉が一瞬にして通り過ぎ岩鷲の右腕は斬られていた

岩鷲「待ちやがれ!！」

白哉「どうやら言葉が通じぬようだ。私は失せると言ったはずだが?」

岩鷲「うるせえ!! この程度でビビッて逃げるような腰抜けはいねえんだよ、志波家の男の中にはなあ」

血まみれになつた右腕を庇いながら言う岩鷲。白哉は表情一つ変えずに向き直り言った

白哉「そうか、貴様は志波家の者か。手を抜いてすまなかつた、貴様はここから生かして帰すまい」

そついうと斬魄刀の上に手を置くと……

白哉「散れ『千本桜』」

白哉の刀身が桜のように散って消えた。岩鷲は呆気にとられていたがルキアだけは逃げる!! と叫んでいた

式「そおい!!」

岩鷲「ゲフツ!?!」

白哉「!?!?!?!」

岩鷲は式に蹴り飛ばされ壁に激突し気絶した。突如現れた式を白哉は目で完璧に追うことができないことに焦っていた

式「よし、ついた。ルキア！　今助けるぞ」

ルキア「その声は……　式なのか？」

式「おう……って岩鷲が倒れている！？　お前のせいか！？　許さん」

ルキア&白哉&花太郎

「「（いや、お前のせいだから）」」

心の中で式にツツコミを入れる三人。花太郎はルキアの知り合いつてことで安心はしているが内心パニックになっていた

白哉「貴様にも死んでもらう」

千本桜が式を攻撃する。式の体から火花が体全体で起き、式は……倒れなかった

白哉「ほう、これを耐えるか。少しはやるようだ……　だが！？」

刀身を戻し斬りかかろうとする白哉をどこからか現れた十三番隊

長、浮竹十四郎によって止められた

浮竹「ふう、物騒だな」

ルキア「浮竹隊長……」

浮竹と白哉が討論しているのを見てると一護がやってきた。浮竹はとても混乱していた、何でだ？

一護はルキアと雑談し白哉に向き直ると戦闘が始まった。重い霊圧にルキアと花太郎が跪いている

式「しっかりしろ」

白哉&浮竹「な!?!」

一護「!?!?!?!」

式は急いでルキアと花太郎の所に行き、フォトンストリームの出力を少し上げて二人の重圧を減らす。この行動に式以外の全員が驚愕した

一護「式…… 一体何をした?」

一護に白哉、それに浮竹までもが驚いた顔でこちらを見ている。俺……何かしたか？

式「急いで一護と白哉の横を通っただけなんだが……」

白哉「なんだと!？」

白哉は驚いていた。後ろにいたはずの旅禍が突然とルキアの前に現れたのだ。一護の質問に「ただ横を通っただけ」と返事した旅禍……目で追うことができなかった。アイツは一体何者なんだ？

式「まあ、そんなことはいいから一護…… 白哉は任せるから後ろの白い髪は任せる」

ルキア&花太郎&白哉&浮竹

「「「(そんなことじゃねえええ!!!)」「」」

またも式以外の心は一つになった。式の言葉を聞き浮竹が構えると一護と白哉が殺し合いを始めた

一護「うおおおお!!!」

白哉「ふん」

白哉の攻撃を防いでは攻撃を繰り返して10分経った。二人とも余裕の顔しているが白哉が口を開いた

白哉「その自信を打ち砕いてやる」

一護の反応にイラつときた白哉は斬魄刀を始解しようとして手を上に置く。一護の危険に現れた夜一さんは白哉の斬魄刀が布？によって包んだ

白哉「これは……」

夜一「久しぶりじゃのう、白哉」

式「あれ？ 俺の活躍が……」

白哉と夜一が怪しい雰囲気になっているのを気にもせずには式は自分の出番が少ないことを考えていた



## 42話〜44話

夜一さんの登場で一護が手助けすると思いき感謝の言葉を言った瞬間、夜一は一護の腹を手で刺し内臓に薬を直接いれ気絶させた

白哉「何をしようと無駄だ。ここから逃げることはできん」

夜一「ほう、たいそうな口を聞くようになったのう白哉ゴウ。お主が鬼ごとでワシに勝ったことが一度でもあったか？」

白哉「なら、試してみる……」

白哉と夜一の鬼ごっこが始まった。二人だけでやっているのだから、式たちはただ見ているだけ

ある程度やっているとな夜一は蔵の上に移動していた

夜一「3日じゃ。3日でこやつをお主より強くする。それまで勝手にじゃがしばしの休戦としてもらっぞぞ」

夜一は一瞬で消えてしまった。ついでに俺たちも連れていってほしいのに……

浮竹「逃げられちまったか」

白哉「……」

白哉はやる気がなくなったのか帰ってしまった。浮竹の配慮で岩鷲は4番隊で治療、ルキアはまた塔に戻された

式「お……俺の出番がー！！！」

浮竹「君は僕と話をしようか」

なぜか式だけ浮竹と話すことになった。浮竹の弟子？がギャーギャー  
ー言っていたのは気のせいである

場所は変わって浮竹の部屋

浮竹「さあ、君たちの中で藍染を殺した者はいるかい？」

式「直球だな」

式は四次元ポケットからお〜いお茶と回転焼きを出して飲む

式「ん〜、お茶はうまいな。いります?」

浮竹「あ…、もらつよ」

浮竹とのんびりお茶しながら一護たちの中に藍染を殺すことのできる者がいないこと。ここまでの道のりを話した

浮竹「そうか、どうやら君たちの中に犯人はいないようだ」

式「わかってくれてよかった。てなわけで……」

浮竹「おっと、すまないね」

納得してくれたことに安堵し抹茶のアイスを出してまた食べ始める式。それをもらい食べる浮竹

そのあともなんだかんだで話をして仲良くなってしまった二人。結局、藍染を殺した者はわからないままだが一護たちを殺さずに捕らえてくれるようにはなった

夜になって小椿仙太郎と虎徹清音が加わり、話は進んでいった

仙太郎は変わった髪型にハチマキを頭に巻いている変わった男である。清音は短めのやや茶色い髪、一見は元氣バリバリの女性に見えるが言葉使いがひどい

式「浮竹さんはいい仲間を持つてるな」

浮竹「いやいや、俺にはもったいないよ」

仙太郎「隊長にそんなことを言ってもらえるなんて感激です!!!」

清音「私に言ったんだよ。ありがとうございます、隊長!!!」

仙太郎「やるのか、清音!!!」

清音「上等だ、ああ!!!」

すぐに喧嘩を始めてしまう二人を見て笑っていたその時、ドオオオオオオ!!!と大きい音が響いてきた

浮竹「今のは一体!？」

式「仲間の一人が戦ってますね」

浮竹はかなり動揺していたが式は誰が誰と戦っているのかわからないので気にせずにお茶を飲んでいた

夜が明けて式が目覚めた。浮竹と仙太郎と清音は川の字になって寝ていた

式「のんびりしすぎt……!!！」

ここにきてやっと式は思い出した。石田が歩いてルキアがいる塔に進んでいることを……

そして、絶対絶命に石田がなることを……

式「間に合わせてみせる!!！」

式はデイケイドライバーを腰に出現させライドブッカーからカードを一枚取り出しバツクルに入れる

『Kamen Ride Decade』

機械音が鳴り9個の灰色の姿が現れ式に集まり頭にカード？が入り  
仮面ライダーディケイドになった

すぐにバツクルから二つのカードを取り出し二枚同時に入れる

『Kamen Rider Kabuto Hyper』  
『Hyper Clock Up』

ディケイドからカブト・ハイパーになり過去に飛ぶ

東仙「恨みはない。だが平和のためなら消すのもやもなし」

目が不自由な九番隊隊長が石田を殺すべく刀を抜いた

東仙「鳴け、す……！?!?!？」

東仙と石田の間にカブトムシの姿に似ている人？がいつの間にか立  
っていた

東仙「貴様は……」

式「俺は天の道をいき総ててを司る男だ!!!」

45話〜47話(前書き)

なんとか更新

## 45話〜47話

東仙の目の前に現れた式は当然のように天道のセリフを言った。デイクライドでなっていることを忘れて…

東仙「カブト虫か」

石井「まさか、式なのか!？」

式「石田…… そんな装備で大丈夫か？」

石田「!! 大丈夫だ。問題ない」

なぜか聞かなくていけない電波?を受信した式は石田に聞いてしまった。ここにきた時を見た目が変わっているから聞いてもおかしくはない

二人の会話が終わって東仙を見ると斬魄刀を構え直してこちらを見  
ていた

東仙「二人いようが同じだ。正義のために死ぬ。鳴け、清虫<sup>すずむし</sup>」

東仙の刀から式と石田を覆うように白と黒の世界に包まれた

石田は満身創痍だったため、驚愕しているだけだったが式は素早くバトルからカードを取り出しディケイドドライバーに入れる

『ATTACK RIDE HYPER CLOCK UP』

電子音が鳴り、式の姿が消える。式が消えてからすぐに石田は気絶してしまった、東仙の攻撃をくらったようだった

白と黒の世界で東仙は石田を足で踏みながら式を探していた

東仙「逃げたのか？ まあいい、こいつだけでも」

東仙が斬魄刀を振り上げた時、突如として真横に現れた式により阻止された。脇腹を殴られ距離を取る東仙

東仙「どこから現れた!？」

表情を一つ変えないまま式に聞く東仙。それを仮面の中で笑っている式は答えた

式「ただそこに現れたただだが？」（笑）

東仙「そんなはずはない、この空間で普通に動けるはずは……」

式が光速の世界に入って東仙の横に移動したことなどわかるはずもなく、東仙は一瞬悩み斬魄刀を式に向ける

東仙「少々やるようだがここからは容赦しない、卍解!！」

今度は東仙を中心にドーム状の空間が作られ、式を閉じ込めた。石田は式が閉じ込められる直前に放り投げたので助かっていた

石田「グホオ!？」

訂正しよう。式に投げられた石田は力加減をしないで投げられたので壁に激突してしまった。そのダメージは背中の骨にヒビを入れるほどだであった

閉じ込められた式は焦っていた。さっきは不意打ちだったため東仙に攻撃を当てることができたが今は何も見えないし何も感じないのだ

東仙「フン!！」

式「クツ?!！」

ギィィン!! という音が一瞬だけなりすぐに無音になる。攻撃をくらった式はすぐさま蹴るがそこには何も無い

東仙「どうやら、さっきの攻撃はまぐれだったようだな」

式「……………」

心の中で「ヤバイよ、ヤバイよ」と出 風に心の中で言い、焦っている式は対策を考えながらガードを固める

東仙「……………では決めさせてもらおう」

ここからは一方的ないじめだった。斬られては倒れかけ斬られては倒れかけという繰り返しだった

何百回という斬撃をくらい、ついに膝をついてしまった

東仙「これで…………… 終わりだ!!!!」

式の命を刈り取る斬撃がどこからともなく迫ってくる、式は全神経を集中させ斬撃を避けようと構える。すると左に妙な違和感を感じた

目だけでそこを見ると斬魄刀が目の前にあった。斬魄刀が迫る中、式は世界の動きが遅くなつていくのを感じた。動きだけが遅くなり思考だけが加速していく

すると一つのカードが頭の片隅で浮かび上がる。それを無意識にバツクルから取り出しディケイドライバーに入れる。この動作に掛かった時間は僅か0.2秒

『ATTACK RIDE AFTERIMAGE - BOMB』

電子音が鳴る、鳴り終わった瞬間……斬魄刀が式に触れた

東仙「!!!??」

東仙の攻撃は当たらずにそこから光が生まれ爆発した

ドガアアアアン!!!!

とてつもない音が一瞬鳴った。そして白と黒の世界が霧のように消えていった

式「ふう、なんとか勝った」

東仙「……………」

フラフラになりながらも立っている、ディケイドに戻っていた式と上手に焼けました〜と言いたいほどに真っ黒焦げになって倒れている東仙だった

式「さあ、これからどうしよう………」

なんとか東仙に勝利した式は休憩も兼ねて座り込んだ

222

石田と東仙を担いで4番隊のいる所に向って走り出した

もう辺りは暗くなり真っ暗闇である。走り続ける式は向かい合う4人を見つけた

雛森「藍染惣隊長の仇を!!」

式は「あゝ、そういえば仲間割れする所だったな」と悠長に考えながら足はそちらの方に向つてた

途中で石田と東仙を置いていき、今回なるライダーまたはロボットを考えつつ飛ぶ

蒼と白のカラーリングに実在の鳥類を髣髴ホウフツとさせる4枚の翼を持つ残虐の天使を想わせるガンダム、ウイングガンダムゼロになった

式「すべてを消し去る…戦うもの、すべてが敵だあーっ!!」

日番谷&市丸&吉良&雛森

「「「「!!!??」」」」

日番谷と雛森の間に降り立ち双方にビームサーベルを向ける

式「無駄な争いをするなら斬る」

雛森「退きなさい!! 退きなさいよー!!!!」

式の忠告を無視して突っ込んで来る雛森をビームサーベルで斬魄刀を弾き飛ばし鳩尾を殴る

雛森「グウ…藍染惣隊長…」

気絶した雛森を日番谷に投げ、市丸の方に振り向く

日番谷「お前は何者だ!？」

市丸「まったく邪魔するやつぢやな」

式「市丸ギン…お前を殺す」

ツインバスターライフルを市丸と吉良の方に向けて撃った

45話〜47話（後書き）

ディケイド・オリジナルカード

『ATTACK RIDE AFTERIMAGE・BOMB』  
（残像と爆弾）

ディケイドがその場に残像を残し空中、あるいは5mほどのどこかに一瞬で移動する

敵が残像に触れた場合、残像が消え爆発が起こる

敵の攻撃が強ければ強いほど爆発の威力は上がる

## 48話(前書き)

A r u t oさん、アストラルさん、ご指摘ありがとうございます。  
修正しました

グラムさん、今後も新しいカードや変身フォームを出していきたい  
と思います

更新が遅れてすいません

## 48話

式の撃ったツインバスターライフルは吉良だけをまきこみ100mほどを完璧に消し去った

市丸「危ないな。まともに食らったら終わりやないか？」

式「大丈夫だ、加減はしている」

20m先に何故かorzポーズで倒れている吉良がいた。日番谷は式の攻撃の威力に驚きながらも構えていた

日番谷「貴様は何だ!？」

ツインバスターライフルを市丸に向けたまま日番谷に振り向き、こう言った

式「ただの通行人Aだ」

日番谷「は？」

市丸「……」

式のセリフはその場所にいる全員をポカ〜ンとさせた。あきらかに失敗しているのだが誰もそのことに触れなかった

式「任務を遂行する」

ツインバスターライフルをしまい、ビームサーベルを出し市丸に斬りかかる

市丸「そんなスピードじゃあたりませんな」

式のスピードを上回る速さで攻撃を避ける市丸。しかし、それこそが式の狙いだということを彼は知らない

7回ほど斬りかかって距離を取った式はブースターの出力を上げる。市丸からはまったくわからない動作

式「お前は俺には勝てない」

市丸「何を戯言を……！！??？」

市丸が言い終わる前に動き出し斬りかかる。その攻撃をギリギリで避ける市丸。その時、ブースターが火を噴いた

市丸「グフ!!!」

市丸の左肩を浅く斬った。しかし、斬魄刀ではなくビームサーベルで斬られたことよって左肩全体がひどい火傷を負った

日番谷「な!? アイツの刀は火の系統のものか!？」

ビームサーベルを火の系統と誤っている日番谷は氷輪丸を出現させ、万全の対策を取っていた

市丸「油断してたわ、こっからは本気でいくで」

式「こい」

最初は守ることしかしていなかった市丸が攻撃を仕掛けてきた。式はビームサーベルで対応し斬りかかる

ブースターをフルに活用しているのに一撃も攻撃が当たらない。それに対して市丸の攻撃は式の体を浅くではあったがほとんどの攻撃を当てていた

市丸「やっぱり、さっきに言葉は嘘やったんか？」

式「……ゼロシステム起動」

小さい声で式は言った。その瞬間、式の視界は広がり世界が鮮やかに見えるようになった

式はビームサーベルを市丸に投げ、即座に動く。狙いは相手が飛んだ瞬間

市丸「あかんや……！？」

その時はやってきた。未来を見たかのような完璧な動きは市丸を完全に捉えていた

式「これで終わりだ」

全体重を掛けてビームサーベルを振りかぶる。それを斬魄刀で受け止める市丸だったが抵抗も空しく壁に吹き飛ばれ激突する

市丸「グウウ！！なんちゆう動きや。こっちの動きが見えるんとかやうか？」

式「……」

市丸の言葉を見殺しして突進する式。市丸は壁から脱出しすぐさま構える

式が攻撃しては市丸が受け流し、市丸が攻撃をすれば式が受け流す。同じことを繰り返してから少ししてお互いに距離を取った

市丸「少しはやるようやけど、まだまだやな」

式「まだだ」

圧倒的に不利な状況の中、式はフェイスシフト装甲（PS装甲）を發動させた。發動することでPS装甲とゼロフレームが融合しZPS装甲になった

物理的な衝撃を無効化する効果があるPS装甲、全装甲の90%を喪失しても戦闘を継続できるゼロフレームの両方を兼ね備えたZPS装甲

市丸「今度こそ終わりや」

式「いい」

市丸がさつきよりも速いスピードで突っ込んできた。式は動かさずに構えているだけだった

ギイイイン！！と金属音が鳴り響いた

市丸「！！！？？」

式「狂った奴を、俺は殺す！！」

右肩で市丸の攻撃を受け止めた。まったく無傷だったことに驚きを隠せない市丸と日番谷。持ち直したツインバスターライフルで零距离で撃った

1回目とは桁違いの威力を放ったが少しだけしか手応えを感じなかった

式「……逃げられたか」

多少の怪我を負わせたことを感じたので追わずに吉良を背負って日番谷の前まできた

日番谷「貴様は何が目的だ？」

式「ルキアを助けること」

松本「大丈夫ですか！？ 隊長！！！！」

日番谷の氷輪丸の気配を感じて松本がやってきた。金髪で巨乳の色香漂うグラマラスな美女で、いつも死覇装の胸元が大きく開いている女性である

松本「お前は！？ 吉良を放しなさい」

式「こいつを市丸の手の届かない所に匿ってくれ」

日番谷「それだけか？」

式「ああ。これでルキアの処刑が誰かの手で操られているのがわかっただろ？」

日番谷「！？ そのことについて話してもらおうか？」

松本「本当なんですか！？ 隊長！！！！」

式「わかった」

日番谷と松本に連れられて十番隊の隊長室に移動した。移動中に元の姿に戻った

日番谷「お前…… 女だったのか」

式「いや、俺は男だ」

松本「何言ってるのよ。どっからどう見ても女じゃない!!」

式「男だから。…… ほれ」

松本の手を取り自分の胸を触らせ女性特有の膨らみがないことを確認させる

松本「////// 本当だ（急に手を握るなんて大胆だね）」

式「日番谷も…… ほれ」

日番谷にも確認させる。すると顔を真っ赤にして下を向いてしまった

日番谷「////// 本当に男だ（なんで俺は照れているんだ!!）」

「ボン

式「何か言ったか？」

日番谷「何でもない!!」

-  
-  
次回  
-  
-

仮面ライダー  
オーズ  
OOOが登場

## 49話(前書き)

更新が遅れてすみません

テストにレポート、試験と忙しい日々でした

急いで書きましたがどうぞ!!

## 49話

日番谷の隊長室についてから重い空気が漂っていた

式「（誰か喋ってくれ）」

日番谷「（話ができん）」

松本「（なんでこの男は無口なんだろ）」

松本が一步前に出てから式のほう向いた。日番谷はそれを見守り、式はやっとかと思っていた

松本「まず、助けられてありがとう」

式「いや、お礼なんて……」

式が市丸の相手をしてくれなかったら自分は死んでいた。雛森を助けることができなかった

日番谷隊長がいるのに安心できず、その場から逃げ出したいほどだった

松本はあの時の自分を思い返しながら心からお礼をした

松本「それでも本当にありがとう」

式「……ああ」

満面の笑みを見て、頷くことしかできなかった

女性って素直（優しいの）が一番だよな、ハハハッと心のなかで  
思ってたりなかったり

ここで時間を無駄にしていることもできなかったなので式は日番谷に  
話をした

式「質問はあるか？」

この言葉を待っていましたとばかりの顔していた日番谷が口を開いた

日番谷「じゃあ、お前が藍染惣を殺したのか？」

式「………」

何この人、めっちゃ直球できたんですけど！！

いやいや、聞き方がオカシイ。たしか、死の原因は斬魄刀のはずだ。  
俺は斬魄刀を持っていない、よって疑うのはおかしい

落ち着け俺、クールになるんだ、クールに……

この間、わずか0.5秒

式「俺じゃない。それに俺は藍染惣のことを知らない」

めっちゃ知っているけどここで生きてて裏切るって言ったら信じてくれないからごまかそう

表情を変えずに答え、日番谷と松本の顔を見る

日番谷「そうか。じゃあ、お前の仲間に一人……死神がいたはずだ。そいつがやったのか？」

式たちの情報はある程度集められていた。石田と一護だけのデータはあったがそれ以外は不明だが……

この情報を覚えていた日番谷はそいつが藍染惣を殺したんじゃないかと疑った

式「ありえないな。目的はルキアの救出だ、それに今の一護に隊長クラスを倒す力はない」

この言葉に日番谷は式の真っ直ぐな目を見て納得はしたが不安を感じた

まず、藍染惣を殺したのは式たちではなく内部の犯行だということそして、一護以外の者は式と同等かそれ以上の実力を持っているかもしれないこと

市丸を追い詰めるほどの実力をもつこいつがまだいる……そんな奴を倒せるのか？

日番谷「そうか、疑って悪かったな」

式「いや、攻め込んでいるのはこっちだ。謝らないでくれ」

日番谷の顔の表情が一瞬曇っていたがすぐに元に戻った

式はその一瞬を見ていたがあえて流した

日番谷「それで貴様はこれからどうする？」

これが一番気になることだった。目の前にいる強者はこのあと何をするのか…… 行動によってはここで斬るしかない

自分の斬魄刀に手を置き、いつでも斬る体勢を式から見えない所で取りつつ聞いた

式「まずはルキアを助ける」

日番谷「もし、邪魔する奴が現れたら？」

日番谷の周りの空気が重くなる。それを感じたのか松本も構えて警戒する

二人の動きを見て何でこう好戦的な人が多いんかねっと思いつきながら話す

式「邪魔するなら足を叩いて逃げる。無駄な戦闘はしない」

この言葉に二人は警戒を解いた

それを感じて式は部屋を出ようと動く

日番谷「俺たちは内部を調べる。できるだけ暴れる」

松本「こっちは任せなさい!!」

部屋を出る前に式は二人のほうを向き、笑顔で……

式「ああ、よろしく」

それだけを言い出て行った

余談だが式の笑顔を見て日番谷と松本の顔が真っ赤になったとか湯気が出たとか……

部屋を出てルキアを助けに行こうとした式だったが焦っていた

式「なんで真っ暗なんだ？」

日番谷たちと話している時は昼にもなっていなかった。外に出たら真っ暗になっていたのだ

しかも、自分の居る場所が森の中だということも忘れてはいけない

式「はあ、変なことに巻き込まれたな」

「????」ぎゃああアアア!!!!!!」

どうやって対処しよかと考えようとした時、後ろのほうから悲鳴が聞こえた

式「先に变身!!!」

腰にオーズドライバーを出現させコアメダルを3つ持ちセットする

オースキャナーをオーズドライバーの前を右から左にかざす

『鷹』『虎』『飛蝗』

『タトバ タトバ タ・ト・バ』

軽快な音とともに式の体をメダルが包み込んだ

式「しゃあ、行くぞ!!!」

赤い鷹の顔に黄色の虎の胴体をして緑の飛蝗のような足を持つ、オ  
ーメダルの力を使って戦う戦士

仮面ライダーオーズが現れた

S I D E    ? ? ?

私は逃げていた。訳がわからず逃げていた

虚が現れたことはわかった。いつも通り距離を取り隙ができた所を倒した

仲間の一人が止めをさしたのを確認し、怪我をしている者を助ける

????「今治すから待つてて」

私は一人一人怪我人を手当てしていく

ちょうど6人目を手当てし終わった時だった

仲間A「ぎゃああああアアア!?!?!」

誰かが斬られた。すぐに悲鳴のほうを向き構えた

????「そ…そんな……」

私が見たのは仲間同士の殺し合い

本来はありえないこと、でも目の前で死んでいく仲間……

仲間B「志波、応援を呼んできてくれ!!」

志波「!? いいえ、ここが私がかい……」

仲間C「お前が一番速いんだ、行け!!!」

志波「……わかったわ」

私は仲間を置いて応援を夫を呼びに行つた

S I D E O U T

俺が見た時、一人の女性が虚に追い詰められていた

式「一撃で決める!!」

オースキャナーをベルトにかざす。すると電子音が鳴り響く

『スピニング・キック』

式の足が本物のバツタ脚状に変化し、空高く飛び上がる

虚「何だ〜?」

かなりの自信を持っている虚のようだ。式を見ても逃げず女性の前  
にいる

式と虚の間に赤、黄、緑の順に3つのリングが現れる

式「せいやああああアア!!!」

3つ全てのリングを潜り虚の顔面に両足蹴りを叩き込む

虚「ガアアアアア!?!?!」

虚は式が1つ目のリングを通過した瞬間に嫌な予感がして回避行動を取っていた

しかし、急に落下速度が上がった式の攻撃を避けることができずに当たりチリとなって消えた

式「そこのお前、大丈夫か？」

着地し辺りを警戒しつつ、女性を起き上がらせる

????「はい、ありがとうございます」

式「……な!?!」

かなり焦っていた。本来ではないはずの人物が目の前にいる

虚によって殺されたはずの志波海燕の妻……志波都しば みやこがいた

## 50話(前書き)

なんとか更新できました。

フラグは多くたてますが成功させるかは決めていません

直死の魔眼の登場を待っている人はもう少し待って下さい。すいません

## 50話

目の前にいる女性、志波 都（次からは都）を確認して思考する

式「俺はやってはいけないことをしてしまったんだだろうか？」

都「何がですか？」

何も知らない都はただわからずに聞くだけ

式はこれから都をルキアたちがいる所まで一緒に行動をするか。このまま、別れるかを考えていた

アニメの修正力が働くこともあるが助けてしまった以上、ルキアの所まで一緒に行くことにした

都「あなたは人間なんですか？ 人の形はしていますが？」

式「ああ、人間だ。少し、変わった力を持っているけど……」

一緒に歩いている時、不意に話をしてきた

式は虚を倒してから今までずっと仮面ライダーオーズの姿のままだった

都からすれば赤い頭に黄色い虎が書かれている胴体、緑の足と完全に不審者か変態にしか見えないだろう

式はこのまま変身を解かずに元の世界に戻りたいために解いていないもし、解いて歴史がおかしくなったら笑えないからだ。まあ、それもいいと思っではいるが……

都「死神ではないですね」

式「ああ、違う。似た力はあると思うけど」

虚を成仏させるのが死神の力なら自分の能力は全てに当てはまるなと式は思っていた

なぜか虚を倒すと死神と同じ結果になってしまっからだ。なぜかは知らないが、どうせ神のせいだろう

自分の能力の違いを少しだけ教えてから話を変える

式「これからどうするんだ？」

都「まず、隊長に報告ですね。あなたも同席ですよ」

式「いや、やめとく」

これ以上の歴史はやめてほしいからだ

俺は過去を変えたくて介入したんじゃないからな、平和に日常生活を送っていきただ！と心で叫ぶ式であった

そんな心の叫びも空しく死神のいる屋敷が見えてきた

式「何でこうなった？」

目の前にはルキアと海燕と浮竹がいた。屋敷が見えた所で逃げればよかったと悔いる

悔いるだけならよかったが海燕が前に出てきて急に言い出した

海燕「俺の都から離れる！！」

式「はい、わかりました」

海燕の言葉に顔を真っ赤にした都から10mくらい離れる

都は離れたことに気づかないまま下を向いている

ルキア「都殿、無事でしたか！？」

海燕「他の奴らはどうした？ 都」

浮竹「アイツは何者なんだ？」

三人は同時に話しかける。都は未だに顔が赤いまま下を向いている  
式は四人を見ながら早くここから離れてくっと思っていた

海燕「俺と勝負だ！！」

式「なぜ、そうなった？」

どこで話がこじれたのかわからないがここは誤解を解くことが重要  
だろう

話をするべく、ルキアたちに5mほど地近づく。すると都の顔が少し  
黒い笑みをしているのが見えた

式「俺は何もしていない！！」

すぐさま方向を変え逃げ出す。目の前に浮竹が現れた。何でここで  
本領を発揮するんだ浮竹ー！！っ！と心の中で叫ぶ

浮竹「正々堂々と勝負するんだな」

海燕「すみません、隊長」

ルキア「私が援護を……」

海燕「邪魔をするな！！ こいつは俺が倒す」

ルキアの援護を断り、こちらに向き直る。援護させるのは助かったが逃げたい

今すぐ変身を解いてカブトになり元の世界に戻りたいと思い、空を見る

海燕「余裕だな。俺はうまくいかないぞ」

ガキイイン！！！！

斬魄刀とメダジャリバーがぶつかりあう。大剣を簡単に振るう式を驚愕した顔で見る三人

4回ほど斬りあい、距離を取った海燕。式は一步も動かずに海燕を見る

海燕「やる気あるのか、あア！！！！」

式「やる気はないし、俺は虚ではない」

海燕「戯れ言を……」

ガアアアアン！！ キイイイイン！！

先ほどよりも多く斬りあう二人。海燕はひたすらに攻撃を続けるが式はただ防ぐだけ

一つだけ違うとしたら、式が少しずつ前進していることだ。海燕は気づいていないが浮竹の顔が引きつっている

ルキアは平然としているため、気づいていないようだ。式は3回斬りあうたびにメダジャリバーにメダルを入れる

海燕「くそつたれ」

式「これで終わりだ！！」

メダルを12枚入れ終わりスキャンする。メダジャリバーが薄く光り輝く

『ドウオデキム！スキャンニングチャージ！』

電子音が鳴り響き、メダジャリバーの刃先が強く光る

海燕、都、浮竹、ルキアに一発ずつ斬撃を飛ばす。4人は防ぐため

に構える

ドガアアアアーン!!!

とてつもない音が響き渡り、地面に4つのクレーターができていた

式「せいやアアアア!」

式は原因を作った都に走り出す。4人が斬撃で倒れているため防ぐことができない

爆発した影響で土が舞い視界が悪くなっていた

都「ごほ、ごほ。……!？」

都の前に出た式は足・腰・肩の順に回転しスピードを殺さずに腹を殴り飛ばす

都「ゴホオ!!」

海燕「都!?!、どうした!？」

周りを見渡す海燕だが視界が悪く10m先すら見えない

その間に式は海燕の背後に移動し、回転を加えた蹴りを背中に放つ

式「話を聞け、ポケエエエ!!!」

海燕「ギャア!!!」

クリーンヒットした海燕は木を3本ほど貫通して止まった

視界がよくなり、腹を押さえてゴロゴロ動き回る都と木の前で倒れている海燕が見えた

それを見たルキアと浮竹は驚愕していた。目の前で副隊長クラスの  
実力を持つ者が簡単に倒されたのだ

ルキア「よくも、海燕殿を!!!」

式「いや、死んでないから。気絶してるだけだから」

浮竹「なんだと?」

浮竹が警戒しつつ、海燕の状態を確かめに行く。ルキアは式をずっと凝視している

まだ、悶えている都を見ながら式は少しスカッとしていた

浮竹「気絶しているだけのようだ」

ルキアの方を向いてから式の方を見て答えて警戒を解いた

ルキアは警戒を解いていないが浮竹を見て少しはマシになった

浮竹「君は何者なんだ？」

式「ある程度は話す」

海燕と都を放置して話を進める。自分は何も悪いことをしていないこと、都を虚から救ったことを伝える

二人の警戒心は完全に無くなりお礼を言ってきた

浮竹「都を助けてくれて感謝する」

ルキア「その…… すまなかつた」

気絶している海燕を浮竹が起こし、事情を話す。途中で暴れたが黒い笑みをした浮竹を見て静かになった

海燕が都を叱りつつ、こちらに向って来た

海燕「妻が悪いことをした。申し訳ない。お前も謝れ!!」

都「本当にごめんなさい」

都の頭を無理矢理下げさせる海燕。それを見て微笑む浮竹とルキア

式は二人を許していいと言って殺気を猛烈に纏いながら言う

式「次したらこれ以上のことをしますよ」(黒笑み)

都「はいいいい!!」

とても危ないものを感じた都はずっと頭を上げ下げしていた。ルキアと海燕は笑っていたが浮竹は真面目な顔をしていた

誤解も解いたので、ここから離れようと移動を始めるが海燕に呼び止められ止まる

海燕「どこへ行く? まだ、礼をしていなんだぞ」

式「用事があるんでこれで失礼する。お礼はまた今度」

本気で走り始めた式は海燕たちから遠ざかっていった。時が経てば忘れられていることだが海燕が絶対にお礼すると考えていること

を知らないまま……

海燕たちと離れてから10分、急に前から眩しい光に当てられ、式は目を閉じた

視界がクリアになっていく。なんでか目の前で黒崎姉妹と雨とジン太と観音寺が竜巻の中にいた

式「何でそうなってんだ？」

疑問に思いつつ、竜巻の中に入る。すると、一番下に虚がいた。黒崎姉妹の一人、遊子が気絶して危険な状態だった

すぐさま、ベルトのメダルをスキャンする。電子音が鳴り響き、一直線に落下する

『スキャンニングチャージ！』

式「そお〜い」

なんともやる気のない掛け声をしながら虚に突っ込んでいく。虚は気づかずにただ回転を続けている

目の前にきてやっと虚は気づいたが避けれるはずもなく当たる

虚「私のライオンちゃ〜ん!!!」

悲鳴をあげずになんか言って成仏していった。変身を解いて上を見ると竜巻の中にいた6人？が落ちてきた

観音寺が黒崎姉妹を持ってパラシュートを使って降りてくる。雨とジン太を受け止めようとしたらジン太が空中で移動し始めた

アイツは超能力者なのか？と思いつつ、雨だけを受け止める

雨「きゃっ」

式「大丈夫か？」

普通に受け止めるべく、体勢をとっていたのだが少し位置が変わったため、お姫様だっこになってしまった

雨「だ……大丈夫です／＼／＼」

式「そうか、強い子だ」

そう言いながら雨の頭を手で撫でる。どんどん顔が真っ赤になっていく雨

『【撫でる】レベルが2に上がった』

式「ん？ そうか、じゃあ…… またな」

雨「え… あ」

変な電子音？が聞こえ、雨の頭から手をどけて立ち去る。離れた時に雨が悲しい顔をしていた

そんなことも知らずに走り去っていく。またも目の前で強い光が発生し場所が変わってしまうのだった

外伝 - 赤い月 - (前書き)

更新が遅れてすいません。言い訳ですが風邪を引きました

サブタイトルはあまり関係ない気がする

キャラ崩壊していると思います、すいません

外伝 - 赤い月 -

強烈な光を見てから視界がはつきりと見えてきた

式「ここはどこだ？」

先ほどまでいた場所とはまったく違う場所に立っていた。周りにはたくさん建物がある

現世に戻ってきたのか？と思ったが誰もいない…… 虫の声も電柱の光もない。完全な闇しかなかった

式「嫌な場所だな」

同じ場所に居続けるのに意味はないと判断し、歩き始める

10分くらい歩き続けて目の前に公園が見えてきた。ありきたりな公園…… しかし、そこだけ重い空気が漂っていた

式「そろそろ出てこい!!」

公園の真ん中くらいについてから誰もいないはずの公園で叫ぶ

周りの空間が歪み、前方10m先の空間だけが変化し闇が晴れ、一人の人？が現れた

170cm前後の身長、どこかの学生服を着た、眼鏡かけた優しそうな男性が目の前に現れた

????「お前がアルクエイドを殺したのか？」

式「何のことだ？」

目の前で静かに強烈な殺気を飛ばしてくる人物、遠野 志貴が現れた

アルクエイドは吸血鬼の一種で吸血種の中でも上位の真祖。人間を恐れた星が生み出した、人間を律する「自然との調停者」である

真祖は世界と繋がることで思い描く通りに自身と自然を変貌させる  
「空想具現化」という精霊の能力を持つ

アニメ版の月姫を見たことがあった式は動揺しつつも冷静に対処する

式「君の言う、アルクエイドとは誰なんだ？」

志貴「知らないふりか……いいだろう。その体に聞いてやる!!」

志貴の眼の色が変わった。日本人特有の茶色から澄んだ蒼に変わり輝いている

「モノの死」 、「死の線」を視覚情報として捉えることのできる魔眼、直死の魔眼

「死の線」とは死の線の源でもあり、寿命そのもの。死の点を突けばそのモノの意味が死に至る

直死の魔眼を発動した志貫がこちらに突っ込んでくる

志貫「ウオオオオオ!!!」

式「何でこうなった？」

腰にデイケイドライバーを手にカードを出現させ、カードをバックルに入れる

『K a m e n R i d e D e c a d e』

電子音が鳴り響き、式の囲むように黒い半透明のライダーが現れ、式に重なる

志貫「やっと姿を現したな、化け物」

式「いや、化けm……!?!」



それが好きな人のためなのか、それとも友達のためなのか

式「まあいい」

こちらもわけがわからないまま、志貫を殴りにかかる

早く元の世界に戻って一番にルキアを助けるために

殺そうとはせず、ただ動けなくするために……。ほとんど死ぬ一歩手前になってしまっただが……

志貫「……………」

式「…… ちい」

志貫の動きは常人ではできないものだった。無駄のない動き、振られる刃の速さ。全てが人間の域を超えている

的確に当てるために大振りではなくコンパクトに拳を出す。無駄のない動きは逆に一番最適の回避しかしないということ

式「ふっ、はああ!!」

志貫「ちっ、らあああ!!」

少しずつ、志貫を捉えていく。そうして、10分くらいが経った時、右のジャブが右肩を捉えた

ドゴオ！！

志貫「ぐううう……」

式「俺の勝ちだな」

右肩を完全に壊したことを知らないまま、警戒しながら前に立ち、膝について動きを止めた志貫の前で勝利宣言をする

志貫の眼はまだあきらめていない。むしろ、燃えていた

志貫「まだだ」

式「はあ、話を聞け」

志貫「ガアア！！」

頭を軽く殴る。タンコブができたが気にせず話を進める

自分がアルクエイドを殺していないこと、その人をまったく知らないことを……

|| 説明中 ||

志貫「俺は勘違いをしていたのか」

式「そういうこと」

誤解が解けたのでこの場から去ろうとすると声をかけられた

???「どこに行くの？ まだ宴は始まったばかりよ」

二人は声のした方に振り向く。そこには外人が立っていた。薄い黄色の短めの髪、162cmくらいの身長をの女性

ただ一つおかしいのは眼が真っ黒で瞳が金色に輝いていた

志貫「…… アルクエイド」

式「あれが…… か？ ヤバイ人？ にしか見えないんだが」

志貫は彼女のことをアルクエイド（以降、アルク）と言った。とても綺麗な女性

髪の色が黒ではなく、白に近いオレンジ。瞳が金色に瞳の周りが黒周りを見渡すと公園にいたはずなのに廃墟にいる。月は黄色のはずが赤い

式「君がこの状況を造ったのか？」

アルク「ええ。それと絶対に逃げられないわ」

真祖の空想具現化の能力によって閉じ込められる。アルクエイドの「相手の個体能力よりもやや上の出力」という力を発揮する

地球そのものから無限のバックアップを受けているだけでも反則なのに、暴走アルクエイドになっているため、100%の力を出せるこの状況を早急に対処しないといけない。式はカードを手に出現させる

式「彼女を殺すか、気絶させるぞ」

志貫「なんだと！？ 殺すのはダメだ。絶対に助ける！！」

こんな状況でも殺さないと言う志貫を無視してアルクに走り出す

手にカードを出現させバツクルにカードを入れてから、空高く飛ぶ

『 Attack Ride Illusion 』

電子音が鳴り響き、式が空中で三人に増え斬りかかる。アルクは逃げようとせず、その場で構える

攻撃がアルクに当たりそうになる所で動きだし、一人目を蹴り飛ばした

式「ガハア！！」

壁に激突し消える。二人目を殴り飛ばし、違う壁にぶつかる。三人目を掴み、地面に叩きつけ殴り続ける

10発ほど殴ると消えた。アルクは二人目を飛ばした方向を見る、そこには禍々しいオーラを纏った式がいた

式「第2ラウンドだ、いくぞ！！」

ブラックホール機関とアマダムを最大限に発動させる。二つの能力によって格段にステータスが上がる

先ほどより少し速い速さでアルクに向かって走り出す。悠々と式を待つアルク

殴ろうと腕を引くとアルクは回避行動を始める。完璧にみきつたその動きは完璧だった。二人がすれ違う時までには……

アルク「ガハアー!!」

式「まだまだー!!」

二人がすれ違った瞬間、式は伸ばしきった腕をアルクに向けて裏拳のように振った

首に当たるとすぐに転回し、蹴り上げる。空中に上がったのを確認し、手にカードを出現させバツクルに入れる

『Attack Ride Gravity』

電子音が鳴り、アルクの落下速度が速くなっていく。さすがに真祖であっても空中で移動する手段はないらしく、もがいている

落下地点に移動し、カードを出しバツクルに入れる

式「ラストー!!」

『 Final Attack Devil Ride De  
e De De Decade 』

電子音が鳴り、黒いカードがアルクを包み込むように出現する。式は飛び上がり、下からライダーキックをする

カードを通過するたびに速度が速くなっていき、式の体を黒いオーラのようなものが包み、濃くなっていく

最後のカードを通った瞬間、アルクの周りを囲んでいたカードが砕け散るとそこから式が現れた。一人しかいない式が何十人と……

アルク「ガアアアア!!」

時間差で一人ずつアルクにライダーキックを当てていく。10分ほど空中で動けず、最後の一人が当てる地面に落ちた

志貫「アルクエイド!!」

式「ふう、これで倒せなかったらお終いだ」

アルクを助けに行く志貫。傷だらけの彼女を見て式を睨みつけてく

る。お前のせいでアルクエイドが!!と目で言っている

式「お前ならどうにかできたのか？」

志貫「それは……………」

黙り込む志貫に近づいてアルクの状態を確認する。細かい傷は多くあるが打撲程度のは数えるほどしかない

仮面ライダーの必殺技（変化している時は通常の2・5倍）をくらってこの程度で済んでいるアルクを見て驚愕する

アルクは気絶したのだが世界はまだ元に戻っていない。すぐに戻してもらうため、アルクの頬をペチペチと叩く

志貫「何するんだよ!!」

式「起きてもらって、元の世界に戻してもらうんだよ」

式の行動に激怒するが理由が正当なため、志貫も協力してアルクを起す

式「起きろ」

志貫「…………起きないと飯抜きだぞ」

遠野の言葉にアルクの体が少し動く。式はそれを見逃さず言う

式「遠野がとびっきりの料理を作ってくれるのに…… 残念。キスマでしてくれるのにな」

志貫「ちよっ!? 何言ってるの!」

動揺している志貫を無視してアルクを見ると飛び上がりこちらに向いた、満面の笑みをして

アルク「起きたよ、志貫!! 早く作って、それとキス」

志貫に抱きつきキスをしようと迫る。それを笑いを堪えて見ている式

志貫「料理は作るがキスはしねー!」

志貫の叫びを無視してキスをするアルク。3分くらいのディープなキスをした

アルク「プハア／／／、次は料理!」

志貫「／／／／／」

式「お取り込み中、すまないが元の世界に戻してくれないか？」

アルク「ええ！！ 料理が待ってる」

アルクの言い終わると世界は元に戻り公園に戻ってきた。なぜか、目の前に遠野 秋葉がいた

志貫はまだ意識が戻っておらず、ただ空を見ている。そんな彼に近づいていく秋葉

秋葉「兄さん、こんな所でこんな野蛮人とキスしてるなんていい御身分ですね」

志貫「…… 秋葉！？ なんでここに！？ こ… これには深〜い訳があつてだな」

冷や汗を流している志貫を引きづって行く秋葉。後ろをついていくアルク。一人忘れられた式

式「さあ、戻るか」

気を取り直して一護たちのいる世界に戻るため、歩き始める。しかし、すぐに呼び止められた

????「あなたの能力について教えてもらいましょうか」

式「次から次へと人がk……」

振り返って言った人?の方を向く。そこには黒い修道女の服をきて両手でドでかい機械を持ったシエルがいた

これほど月姫のメンバーに会えることに喜びつつ、自分の運の悪さを呪った

逃げようと思ひ、周りの気配を探る。誰もいないのを確認し、体勢を低くして言う

式「もう勘弁してー！ー！！」

シエル「逃がしません！！」

こうして、夜が明けるまでリアル鬼ごっこをした式とシエルだった

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
?

## 51話〜54話(前書き)

久々に更新

更新が遅れてすいません。ゲームに没頭していました

ティルズオブザワールドレディアントマイソロジー3

SDガンダム ジージェネレーション ワールドをしていました

SDガンダムのABILITYを加えようか考えています

後書きにネタバレを今回は書きます

今回もかなりgdgdで無理矢理な話ですがどうぞ!!

## 51話〜54話

場所が変わり、空中に移動していた。下には更木がいるのも知らずに式は変身を解き、落下する。

ドオオオーーーン!!!

着地に成功し、周りを見渡す。後ろに更木、前に東仙と七番隊・隊長の狛村がいた。更木がいることに焦りながら前にいる二人に質問をした

式「ルキアはどこに？」

狛村「お前も先ほどの旅禍も捕まえさせてもらおう」

更木「お前は……あの時のオー!!」

式に向って斬りかかろうと動こうとした時、東仙が剣を飛ばして止める。東仙が前に出て剣を更木に向けて言う

東仙「狛村……その旅禍は頼む」

狛村「わかった。場所を移すぞ、旅禍」

式「わかった」

狛村と式は違う場所に移動する。残されて二人の片方、更木は不満な顔をしていた。彼からすれば本当の獲物が逃げたのだから

更木「即行でお前を倒してアイツを倒す!!」

東仙「それは…… できない」

式は狛村が止まったのを見て動きを止める

狛村「捕らえさせてもらう」

式「それは困る」

式は創造する。最強のコーディネイターが乗っていた機体を……。すると、式の姿が一瞬にしてストライクガンダムに変わる

狛村「それが貴殿の力か、では参る!!」

式「ラアオオ!!」

斬魄刀とアーマーシュナイダー（以降、シュナイダー）がぶつかりあう。わずかにお互い押し会うが力負けし、後ろに飛ばされる。転ばないように体勢を保ちつつ前を見る

狛村が突進してくる。バルカンで牽制しつつ横に移動する

狛村「なかなかやるが我を倒すことはできぬ」

バルカンを斬魄刀で簡単に防がれ、目の前まで接近される。その時……  
式の中で種が割れた

迫りくる斬魄刀を紙一重で避ける。その動きは前よりもかなり速い、急な反応に隙がうまれる。

式「ハアアア!!」

わずかな隙を狙い殴り、狛村は少し後ろに飛んだ。二人は立ち上がり構え直す

狛村「言い直そう、貴殿は…… 強い。こちらも全力でいかせてもらおう…… 正解!!」

狛村の後ろに鎧兜を身に纏った山のような巨人が現れた。その大きさに唾然とする

鎧兜が刀を振り下ろす。振り下ろされた時に気づいたが遅く、回避できないことがわかり両手にシュナイダーを持ち受け止める

式「ガアアアアア!!」

受け止めることはできたが足が埋もれていき、シュナイダーにヒビが入る。すると鎧兜が刀を上上げる

前を見ると狛村が振り下ろす動作をしている、鎧兜も同じように振り下ろす

式はシュナイダー二つを片手に持ち、ストライカーパックを創造する。右肩と右腕に青い武装が現れる、そしてシュナイダーが一つの大剣となった

式の姿はソードストライクガンダムになる。少し違うとすれば大剣が本来の物ではないことだ

ガンダム アストレイ ブルーフレーム・セカンドLが使う、タクティカルアームズになっている

式「ウオオオオオオ!!」

ガキキイイイン!!

斬魄刀とタクティカルアームズがぶつかりあい、押しあう。お互いに退かず、ただ力を込め相手を倒すために……

均等を破ったのは式だった。タクティカルアームズについているブースターが火を噴き、斬魄刀を押し上げていく

押しあいにも負けた鎧兜は後ろに下がった。倒れるほどではなかったことに苛立ちながら突進する

粕村「なめるな!!」

式「らあアア!!」

また、刀と大剣がぶつかりあう。ブースターを使っているのに押しあっている。すぐさま、式は大剣の形を変える

大剣の中からガトリング砲が現れる。刀は式の横に落ち、衝撃で式は少し後ろに動くがガトリング砲は粕村を向く

式「これで終わり」

ガトリング砲が回り、弾が発射される。ほぼ全ての弾が狛村に当たる

狛村「ぬううウウー!!」

全弾当たったはずなのにまだ、立っていた。鎧兜は消えていたが斬魄刀を構えてこちらに近寄ってくる

仮面が壊れ、顔が露になる。オオカミの顔していた、どうやら……

人狼のようだ

式は狛村に一瞬で近づき、腹に殴り気絶させる。彼を壁にもたれさせてルキアの所に向かおうとする

式「そこにいる奴、何かあるなら早くしろ」

???「わかっていますか」

狛村の横に現れたのは四番隊 - 隊長の卯ノ花がいた。一番話しやすい人だと式は思っている

彼女はすぐに治療せず、質問してきた

卯ノ花「なぜ、殺そうとしないのですか？」

式「殺す理由がないから」

式の答えに卯ノ花は難しい顔するがすぐに優しい顔に戻る。いちよ  
う、警戒だけをして話を続ける

卯ノ花「では…… どんな理由があれば人を殺すのですか？」

式「それは…… 俺が思い、考え。そして、悪だと感じた者を殺す」

式はそれだけを言い、飛び去って行った。後ろにいる二人を気にせ  
ずに

卯ノ花 視点 S t a r t

あの方はとても綺麗で純粋な人でした。しかし、なぜ、あの方は闘

うのでしょっ？

そんなことより狛村さんを治療しましょう

卯ノ花「まったく、無茶をしていけませんよ」

狛村「無茶ではない。クソ…… ギャ?!」

はあ。なぜ、こんなにも血の気が多い人がたくさんいるのでしょうか？ まったく、命は大切にしてほしいものですね

それにしても狛村さんほどの方が負けるなんて、彼には注意するべきでしょうね

少し痛めに治療してますけど、今後は怪我をしないでほしいのですが……

卯ノ花「狛村さん、なぜ彼と闘っていたのですか？」

狛村「彼が旅禍だからだ」

へ?! それだけで穏便に会話で解決をせず、闘っていたんですか？ まったく、まずは理由を聞いてからでもいいのに……

誰かが死にかけているようですね。そろそろ行かないといけませんね

狛村「他の患者の方に行ってください」

卯ノ花「ええ。緊急処置だけしかしてないので、救護班がいる所に行ってください」

私は急いで死にかけている患者の方に向かって移動した

卯ノ花 視点 End

大剣を背中に無理矢理背負い、ブースターにして加速し飛び続ける前に見える崖で青白い光が立ち上がっていた。崩玉が開放されたことを意味する

確実に間に合わない（出番の意味で）。それだけは回避しなければいけない

二度目に神と会った時にもらっていた魔戒剣を取り出し、頭上で回転させる

頭上が光出し、光の中から黄金の鎧が現れてくる。そして、式の全身に装着される

式「これが黄金の魔戒騎士の力か……」

黄金の狼の顔に全身を覆う黄金の鎧、青い瞳。何より、体から溢れんばかりの力が式の体を満たしていた

飛ぶことができなくなったが身体能力などが格段に上がったことで一瞬にして処刑台の上までもいきり飛び上がる

ルキアの前には刀だった物が炎の鳳凰に変わり、今にも突撃する所だった

式「…… フン!!!」

鳳凰に向って魔戒剣から牙狼剣に変わった剣で攻撃を受け止める

ルキアは目の前で起こったことを理解できない顔をしている。式は受け止めるだけではなく、そのまま……

式「ハアアアア!!!」

ルキア「なあ!？」

鳳凰の中にある刀ごと鳳凰を斬った。炎が地面に降り注ぎ、煙が舞う。そのまま、双極（処刑台）の上に立つ

そして、牙狼剣を突き刺そうと構える

ルキア「お前は誰だ!!」

式「俺だ、ルキア。式だ」

ルキア「何!? 式だと…… 声はたしかにそうだが」

式「今から処刑台を破壊する、そうしないとルキアを助けられないからな」

驚愕の顔をして、何かを言っているルキアを無視して処刑台に牙狼剣を軽く刺す。双極は一瞬にして形を消した

塵一つ残さずにその形を完璧に……。落ちるルキアを掴みとり、敵である死神たちから少し離れて所に降りる

????「貴様、一体何をしたか…… わかっておるのか?」

一番偉く強い、一番隊・隊長の山本やまもと 元柳斎げんじゅうさいが話してきた

見た目がお爺さんだが威圧感だけはありえないほど出ていたため、式はすぐに攻撃できるように構える

式「ああ、友達を助けた。ただ、それだけだ」

元柳斎「それだ……」

恋次「ルキアああー!!!」

元柳斎の言葉を掻き消すほどの声を上げて後ろから恋次が走ってこちらに向ってきていた

それを確認してルキアを受け取りやすいように投げる

恋次とルキアが悲鳴をあげていたが無視して前を見る。副隊長クラスの死神が3人、こつちに向ってきていた

簡単に倒そうと牙狼剣を地面に刺すと3人は吹っ飛んでいた。一護が急に間に入ったようだ

一護「式、俺も加勢するぜ」

式「ああ、頼む」

恋次「俺に謝れ!!! この狼野郎ー!!!」

ルキア「何をするのだ!!! 式——!!」

後ろからギャーギャー叫んでいるがそれを式は無視をする。一護が恋次に任せたと行って斬魄刀を動かす

それを理解した恋次はルキアを抱えて走り出した。一護は迫ってきた白哉の攻撃を受け止めている

元柳斎がこちらにこようとしたりした時、浮竹と京楽が彼を止める

浮竹「ここは通さない!!」

京楽「あっちに行かされると困るんだよね」

2人が元柳斎と闘い、一護は白哉と闘う。式はただ、その場に止まる。すると、横に誰かが降りてきた

夜一「ふう、どうやら間に合ったようじゃの」

式「ええ、そうですね。誰を足止めしましょうか?」

姿が変わっているのに式だとわかってる夜一に驚かずに隊長クラスを見つめる。そして、お互いに走り出す

51話～54話（後書き）

直死の魔眼は藍染惣との闘いで使います

藍染惣をフルボッコにしたあと、藍染惣と一緒に虚圏ウエコムンダに行きます

55話〜56話(前書き)

一ヶ月ほど更新せず、すいません

軽くスランプですが頑張っていることと思います

## 55話〜56話

俺は2番隊 - 隊長の碎蜂ソイフォンが13番隊 - 副隊長の小椿こつばき 仙太郎せんたろうを襲うのを止めるため動く

剣を背中に置き、わざと簡単に止めたように見せるため片腕で肩に手を置き動きを止めた

碎蜂「離せ」

式「彼は君の仲間ではないのか？」

碎蜂「離せと言ってる！！」

力任せに手を離され、距離を取られる。俺は彼女のことをあまり好きではない

自分より下のモノをゴミのように扱うんだからな。はあ、浮竹のような人が隊長になるべきだ

横で夜一がこちらを見ている。四番隊 - 隊長の卯ノ花うのはな 烈れつがいたはずなんだが？

式「援護はしてくれないよね、どうせ……」

夜一「そうじゃの、お主の力を見抜かないといけないからの」

碎蜂を警戒しつつ周りを見ると3人以外誰もいない。どうやら卯ノ花が回収して行ったらしい

心配がどんどん離れていくのがわかる。頑張つてアイツらを止めようとしろよ!! あきらめんなー!!

できませんと言つてあきらめている卯ノ花が一瞬見えた。俺はどうなるんだよ、バカ!!

碎蜂「なぜ夜一、お前が!？」

夜一「こちらにも事情があるからの」

式「とりあえず、あきらめてくれない？」

碎蜂「このクズを倒してすぐに答えてもらつ」

俺の話聞いてねえーと思つているところに強い殺気を放ちながら向つてきた

背中にある剣を持ち斬魄刀を受け止める。斬魄刀を押し、距離を取つてバスターカを出現させる

2人とも驚いていたが気にせず連射する。地形がボコボコになつていくが仕方がない

本当に動きが早い。今までで一番早い相手だろう、なんかだるいな  
と思いつながら距離をとる

碎蜂「お前では私は倒せない」

式「そうかな？」

少しだけ早く動きつつ、ビームライフルを出現させ持ち変えて連射  
する。碎蜂にはまだ当たらないが先ほどよりはマシになった

このまま突っ込んでみるかな。100mほど距離が離れてすぐに直  
線に突っ込む

碎蜂からしたら賭けに出たんだと思うだろうがそうは違う。剣を前  
に突き出して少し進んでから投げる

押すように投げたため予備動作がない、不意をつくことに成功した  
がギリギリで避けられる

碎蜂「まだまだだn!？」

目の前に現れた式にびっくりした碎蜂にゼロ距離で途中で拾ったバ  
ズーカで当てる

ドガガガアアアアン!!!

爆音とともに煙が発生し周りを包みこんだ。先に煙から出てきたのは碎蜂だった

ゴロゴロと転がり倒れる。煙が消えて中から式が無傷でただ呆然と立って現れる

式「終わったか……」

動かない碎蜂を見て言う。斬魄刀が解放されないまま決着がついたことに安堵しながら周りの気配を探る

「護は生きている、他のみんなも。こっちに向かってきていることがわかった

碎蜂「まだだ！！ 卍解！！！」

碎蜂の斬魄刀は消えて鉤爪のような形になり右腕に現れた。碎蜂は袖を破って肩を出した

突っ込んできたことに気づけずに一撃くらう。距離を取り夜一の方を見て碎蜂は言った

碎蜂「私はあなたより強くなった」

式「俺のことを忘れないでくれ」

碎蜂が夜一に話しかけているところを邪魔する。まったく、これで俺を倒そうとはな

俺は剣を拾い、碎蜂に向って走り出す。振りかぶる途中で大剣に変化させる。受け止めようとした碎蜂は回避できず踏ん張る

式「過去に囚われているやつに負ける気はない」

碎蜂「なんだと!!」

わざと距離をとり黄金の翼を広げる。空高く飛び上がり、急降下して斬りかかる

ガードされるが蹴りを当てて離れ、もう一度斬りかかる。この行動を何回も繰り返す

碎蜂の体力は無くなっていき膝をつく。式はそれを見て地面に降り立つ

式「これで最後だ」

碎蜂「こんな奴に……」

式「過去を振り切ってから出直してくるんだな」

黄金の翼が細かく分散し碎蜂に向って飛ぶ。吹き飛ばし打ち上げては落としてを繰り返す

何十回と続いて終わり地面に碎蜂は倒れた。夜一の方を見ると悲しい顔になっている

昔のことでも思いだしているのか、式の攻撃の酷さでこうなったのかはわからない

式「これで一護たちを助けれるな」

黄金の鎧を解き、歩き出す式を夜一は目の前に現れて止める

軽い殺気を放ちながら、こちらを睨んでくる夜一はとても怖い。俺が何かしたのか？

構えて夜一を見ると一瞬で真横に移動し殴られた。防御が間に合いあまりダメージはない

式「何をする？」

夜一「ここらでお主の本質を見抜くべきじゃの」

夜一は連続で攻撃してくる。それをぎりぎりまでガードはできているがすぐに一発くらってしまふ

少し離れてバズーカを拾いデタラメに連続で撃ち、煙が発生し視界が悪くなってお互いに場所がわからなくなった

ここで本質を見抜くとか空気読めよ。騙されてるバカたちを制裁しないといけないのに……

式「すぐに終わらせる!!」

夜一「やってみい」

俺は戦争を根絶しようとした機体。ソレスタルビーングの主人公機を創造する

体の全てを包み込み、ガンダムエクシアになる。ビームを夜一がいるであろう場所に撃つ

ドオオオオンっとな音だけが響く、かすりもしなかったようだ。空中に行くことはやめて回転する

すぐに煙は消えて周りが見やすくなる。前にはいないことを知り、すぐに気配を探すと上にいることを知り上を見る

夜一「ほう、よくわかったの」

式「とりあえず、エクシア、目標を駆逐する」

GNソードを構え突っ込む。ゆっくりと振りかぶり夜一は空中に逃げた所にGNバルカンを連射

少しだけ当てることに成功、着地する瞬間を狙ってGNショートブレイドを2つ投げる

一本目を避けられるが二本目はガードして吹き飛ばす。後ろに先回りしてかかと落としをしようとするが避けられる

夜一「なかなかやるようじゃのう。しかし、まだまだじゃー！」

右腕を横に水平に伸ばす。するとバチバチと霊圧が現れる、周りの地面をえぐりながら

着ている服の肩の部分がビリビリと破けてそこからも霊圧がバチバチと現れる

式はGNショートブレイドを1つ投げてGNソードで斬りかかる。

夜一は簡単に受け止めて投げ返してきた

式は返ってきた剣を斬り払って回転し回し蹴りをするがまたも受け止められ吹き飛ばされる

夜一「やはり、ワシよりは弱い」

式「これから本番だ、TRANS-AM!!」

式の背中から赤い粒子が放出され、体が赤く発光する。そして、式の姿が消えた

さあ、これで性能は3倍ほど上がった。これで終わらせる!!

夜一「っ!? そこじゃ!!」

ギリギリで殴りかかった左腕を受け止められるが右腕のGNソードで振りかぶる

ドゴォ!!っという音が鳴り響き、夜一は吹き飛ばされる。左側を見ると左肩を抑えながら立ち上がっていた

夜一「ガフウ!!」

これでラストだー!! っとなの中で叫びながら突貫する。未だに体勢を立て直していない夜一の後ろに移動

首にGNソードをつきつけることで動きにくい体勢になった。逃げられることはないだろう

式「これで俺の勝ちだな」

夜一「ふふ、これほどだとわの〜」

殺意が無くなったことがわかり、ガンダムエクシアの状態から元に  
戻り立とうとして失敗した

前にいる夜一を抱きしめてしまったが倒れる所まではいかなかった

夜一「何をするか／＼／＼ バカもの／＼／＼」

式「すつ…… すまない／＼／＼」

お互いに赤い顔になりながら顔を赤くして離れる。式は道具を取り  
出し夜一を治療する

治療中も夜一の顔が赤かったため、少し時間が掛かったのは仕方な  
いだろう

そのころ、元柳斎と浮竹京楽の3人は斬魄刀を解放して睨みあい  
している所だった

一護と白哉の2人は少し斬りあい、軽い準備運動をしていた。織姫  
たちは順調にこちらに向ってきている

夜一「すまんが碎蜂も治療してはくれぬか？」

うつぶせに倒れている碎蜂をこちらに持ってきてゆっくりと床に置く。式は治療道具を出して治療する

なんか、女性を治療することはエロいなと思いつつながら表情に出さずに包帯を巻いて終了する

式「夜一さんは織姫たちを探してくれ、こちらに向ってきているはず」

夜一「夜一じゃ」

式「……へ？」

夜一「だから！！ワシのことは夜一と呼べ／＼／＼」

式「わかった」

ここにきて夜一が式にデレてしまう。今後の関係に期待したい

俺は夜一さんがこんなキャラだったのかと考えながらつい「はい」と答えてしまった。よかったのだろうか？

とりあえず、ハレームでも目指せば w b y 作者

変な電波を受信したと思ったが気のせいだろう。2人と闘って疲れが溜まったせいだろう

夜一が織姫たちを探しに行つて式は元柳斎の3人がいる所へと向つた

全ての責任が自分に向けられることを知らずに……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9763m/>

---

BLEACHに介入させられる俺

2011年5月17日18時21分発行